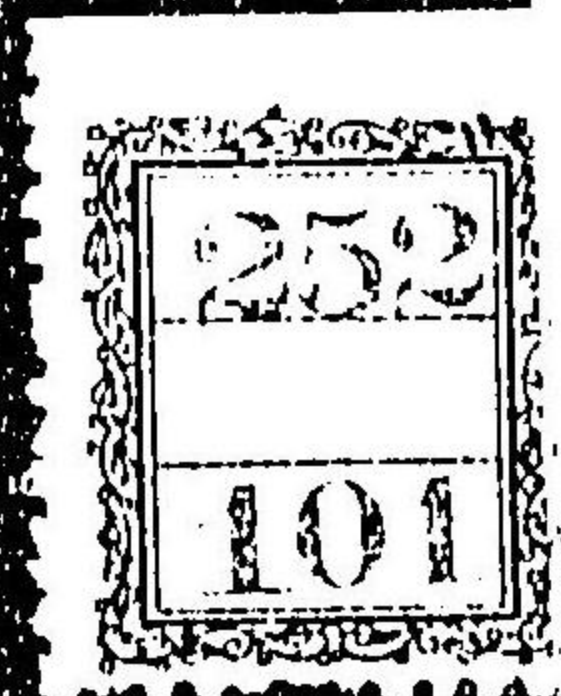
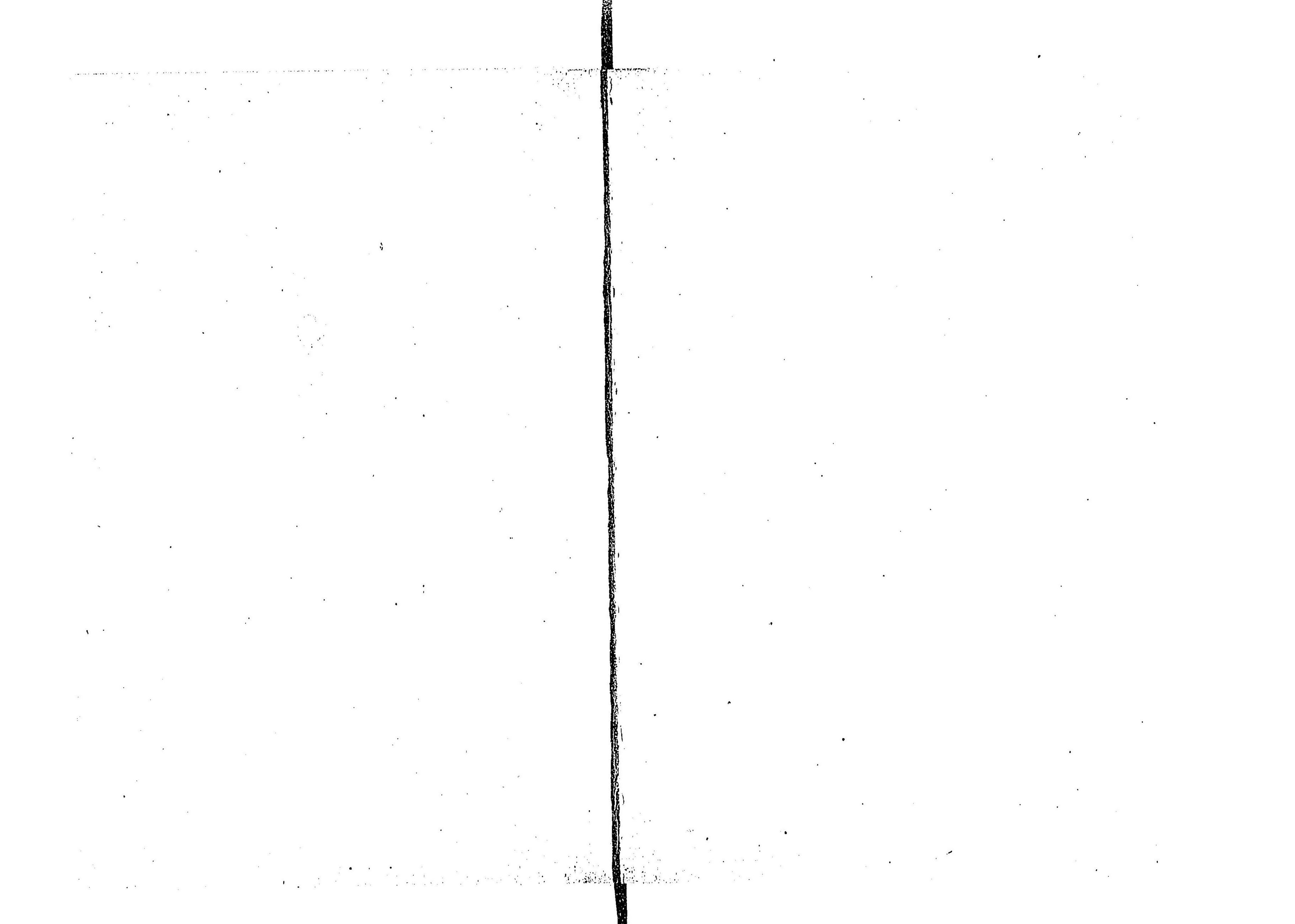


佛敎講演集

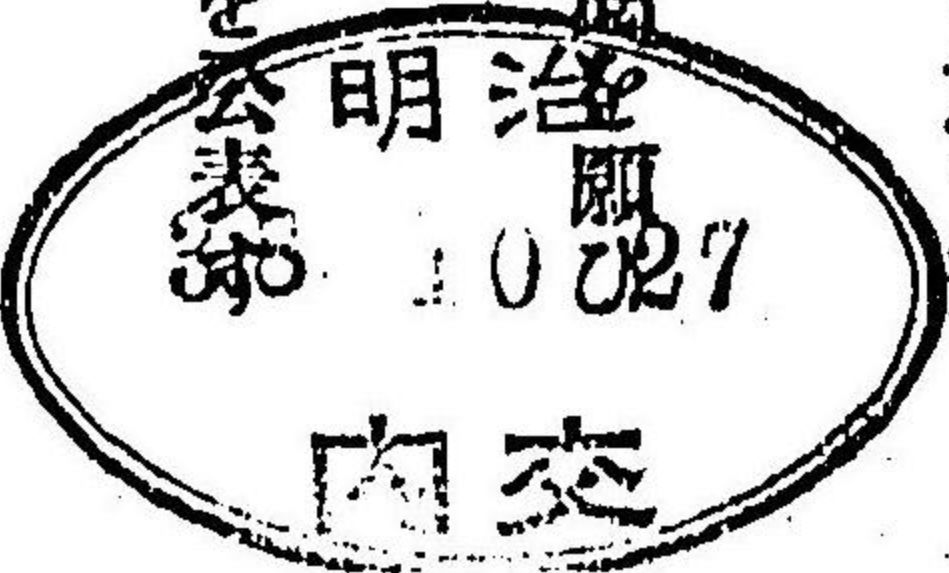




緒 言

一。本集は特に戦勝の純念として世に公にするに至れるものなり。されは内容の如きも十分吟味すべき筈なれど。編者の懈怠よりして。思ふ如く運ばれず。只だ會場に於て委員等のノートに筆記せる儘を蒐集したるに過ぎざるなり。従つて

一。文体の統一も。また。難疎漏の罪逃れ難きも。幸に講師各位に原稿の校閲得たもは聊か編者の功を感ずる所なり。
一。本集に附録する所の有志諸氏の寄贈金品の報告は本集附録中の最要件なりとす。實に今回の舉に替せられたる諸氏の厚意に對して本會は一片の領收證さへ出し居らざれば本集を贈呈して其厚意を酬せんが爲めなり。



一。本集に掲けたる各講録は。委員藤井、藤澤、羽栗、及び松本の筆になりしものなれど。近角氏の講話は殆んど全篇。中外日報記者の筆録によれるものなり編者は特筆して

茲に中外子の厚義を謝せんとす。

一。かくの如くしてなれる本集は。決してく世の所謂講演集の如き面影も存し得ざる事は。編者の元より覺悟する所。要は只だ。此一片粗雑の冊子によりて。聊か慈光の宣傳をなし得て。親愛なる兄弟姉妹の道に志すものを。裨益する事あれば望外の幸せなり。一。編者は最後に重ねて。講師各位の繁務を割きて。本集に多大の庇護を垂れ給ひたる厚意を感謝すべきなり。

明治三十八年九月

編者識す

目次

- 一 緒言.....
- 一 開催史.....
- 一 佛教大意.....(二回)..... 吉谷覺壽師..... 一
- 一 信之説.....(二席)..... 赤松連城師..... 三
- 一 七佛通誠の偈..... 藤島了穩師..... 七
- 一 現時の信仰問題..... 近角常觀師..... 三
- 一 序説..... 三
- 一 實驗的信仰..... 四
- 一 罪惡の救濟..... 四
- 一 絶對他力..... 四
- 一 横超涅槃..... 四

一時局と佛教……………藤島了穩師……………三

一談話一片……………野々村直太郎氏……………三

附 録

一 夏期講習會記事……………一

一 開催趣意書……………五

一 聴講者の宗教別統計……………六

一 聴講者の職業別統計……………七

一 聴講者の所屬各學校……………七

一 寄附金受領報告……………八

一 寄附物品受領報告……………一四

一 支出報告……………一五

一 決算報告……………一六

一 京都市聯合佛教團定期聖會告示……………一七

以上

京都市聯合 夏 期 講 習 會 佛教青年會

本會は如何にして生れたるか

を一寸概畧御話致しますに就きましては勢ひ。從來佛教青年者に成り立つて居た夏期講習會の歴史から御話しせねばなりません。夫れはなかく三十分や四十分間には申せませぬ。省きます積りですが其生れた年丈だけでも御紹介致しますれば明治二十四年であつたを承り居ります。夫れから今年まで約十五ヶ年の間。殆んど一年も休む事なしに開會せられ殊に明治二十六年に東西二ヶ所に該講習會が開かれたを端緒として。中途よりは關西佛教青年會なるものが組織せられ。關西は關西としての獨立的講習會を開ひたのも昨年まで十何回となつて居ります。が今年になりましたは、種々の事情の爲めに夫れを開く様になりませなんだ。實に遺憾の次第であります。

通常の場合でも毎年習慣の様になつた事を。一度でも休むと云へば。餘り快よいものではありません。然るに本年の如きは。如何です。我大日本帝國開闢已來の大戦争に於て

連戦連勝。國威は正に六合を破照して。一躍世界一等國の名譽を擔はんとする時に當りまして。如何に物質的の戦争には勝ちましたも。更に進んで其精神的戦争に於て敗北する様な事になりました。ド一致しまするか。即ち精神的文明の發展を斗らなんだ日には。前途誠に憂慮に堪へぬではありませんか。而も今年の如く紀念すべき光輝ある年に於て。一般の同胞が相集まりて精神の修養發達を助成すべき講習會を開かぬとは。實に千古の遺憾と存します。否な私共か遺憾と思ふのではない。大悲のみほとけが。夫れではよろしくない。我道の信するもの此時に當りて何をして居るのであるかとの。御警誠如此小さき私共の胸の上に與へられました。如何にもと反省させて頂た所から。何ても如來の大命に敬順して。此處一番。大に其道を講せさせて頂かねばならぬとなつたのです。

さりながら。何分事が急であるので。時日もないから一々關西佛教青年會の各團體に交渉して居る。餘裕もありませぬから。兎も角。日本佛教の中心たる此京都に於ける各佛教青年團體を綜合して。一團となる。形ち丈けは如何に小さかろうとも。我々の精神

の有り丈けを活動させて。速に夏期講習會を開かうと云ふ事になりました。先つ市内八ヶの發起團體の聯合を確實にし次て三拾二ヶの賛成團體を得まして更に。市内有志の士の同情に訴ふる事に致しましたが。佛陀の照護空しからず。僅かに旬日を出でざるに此盛大なる講習會を開かせて頂く事になりました。元より來會者諸君の大きな御眼光には此位の事は赤兒の遊戯の様に映じますかも明りませぬ。併し。私共の如き白面乳臭の輩が未だ人世に何等の經驗もなくして。兎も角講習會の眞似見た様な事でも出來ましたのは。私共にとつては。なか／＼の盛の様に感せられました。此結果を御興へ下された佛陀の大悲に向つて満身の感謝を捧くると共に。此舉を一笑に附し給はず反て。滿腔の同情を注ぎ給ひて。多大の御援助を垂れられたる。有志諸君に對しては私共委員一同の深く鳴謝する次第であります。(中略)

吾人の希望

本會は實にかくの如くして生れたのであります。私は本日委員一同に代りまして。茲

に本會の成立の概畧を述べさせて頂きました。

最後に私は本會が日露戦争の大紀念として建國以來未だ曾て見聞した事のない當市聯合佛教青年會の夏期講習會をして自今以後彌まじに隆盛ならしめ年一年其發展を斗り。盡十方無尋の佛光をして。諸有衆生の迷闇を照破なし給はしめん事を、稱名十遍滿身の感謝と祈禱とを捧げ奉る。南無阿彌陀佛

明治三十八年八月五日

於建仁寺山内禪居庵

京都市聯合佛教青年會

委員總代 松 本 雪 城 敬白

佛教講演集

京都市聯合佛教青年會編纂

◎佛教大意(第一回)

吉 谷 覺 壽 師

此度京都市聯合佛教青年會の發起により本日より夏期講習會を開設せらるゝこと其趣意は追々辨せられたり。

抑夏期講習會の創立は今より十四年前、即ち明治二十四年須磨の浦にて始めて佛教夏期講習會を開かれ、拙者も出席し清涼心要を講せり、其以後東西兩部に分れ年々盛大なる講習會の開かるゝことは誠に目出度ことである。今日の開會は全く委員の熱心に由るものと感ずるの外なし。

近來は佛教の性質を誤り、只老人の隱居仕事として、未來の心の行先を用意するものと

思ひ、現世の爲め實益あることを忘却せり。余は常に必ず此事を云へり、されど今は之を細述せず直ちに佛教の大意を御話申さむと思ふ。

そも佛教は云何なるものなりや、佛教と云へば一切經ありて明藏にては經論釋等併せて六千七百七十一卷あり、而して其あらゆる佛教は云何なる事を説けるものなりやと其眺め方を云へば其宗其宗の開祖皆教相判釋を爲せり是れ即ち其宗にて一代教を見たる見方なり、華嚴は五教十宗により天台は五時八教を以てし法相は有空中の三時教により淨土門は聖道淨土の二門を以て各一代教を見る、其他畧之。今一宗一派に偏せずその眺め方を言はん、一言せばあらゆる佛教は只心と云ふ一字を説きしものなり。佛教は大小二乘頓漸二教八萬四千の法門數多けれど只心の一字の活用を説く、經文に就きて之を述べれば佛の最初の説法は華嚴經、最後の説法は法華經にて、始終を言へば中間は自ら知らるゝならむ。

第一華嚴經に心は工なる畫師の如く種々の五陰を作るとあり、舊譯には五陰と云ひ新譯には五蘊と云ふ五蘊とは色受想行識にて、こは大体肉体と精神との事なり、此中には人間畜生天上界等あらゆる衆生を含む、要するに心は甚巧妙にて悟の身をも迷の身をも造り出すてふ意なり。即ち佛と衆生と兩者別なりと思ふべからず皆我心より生ずる事猶は恐ろしき鬼も柔和なる佛も相好こそ異なれ元是れ同一の筆の畫師の手腕によりて各別に紙上に踴如たるが如し。

心佛及衆生是三無差別の文亦心の活きを説く、心は中心と爲りて悟の佛と迷の衆生とを造り出す、心を離れて佛も衆生も無し。例へば心は草津の追分の如く右は東海道、左は中仙道なり、迷へば六道となり、悟れば佛となるこの意なり。

三界唯一心とは迷の衆生が住處とする欲界色界無色界の三界は唯だ一心にして、歡樂の夢果しもなき天上界も苦痛極まりなき地獄も皆一心より起れり。

心造諸如來。佛は永久の昔より有るに非ず、迷の衆生が修行の結果得たる位にして心能く佛を造り出すこの意。

華嚴經には六十卷の經八十卷の經あれども此等の文數知れず、そが意を汲し世親菩薩は唯識論を造れり、唯識唯心其名異なれど其意同じ、唯識云と云は唯識論に深密經の文を

引て曰く識所縁唯識所現なりとありて、天地間の萬物は各自の心より現れたるものにて、即ち天地間の萬物を眺むるに山川人畜實體ありて存在すと親るは迷悟の所見にして皆是れ假有實無真にあることなく或は又非有似有、と云て實に有りと爲すは誤れるものなりと立るこれ唯識論の妙味ある所なり、唯識と云ひ唯心と言へばとて世界中の萬物格も人玉の如く一塊と爲りて存せりと云ふに非ず、萬物は其儘存在し乍ら心を離れて別にあるに非ず畢竟心の活きなりと解するが唯識の意なり。

解深密經に曰く、此心還りて此心を見ると。先の此心は眺むる心、後の此心は眺めらるる萬有の現象なり、他人の事柄を眺むるに非ず自ら造りたる事物を見る、此文意は西行法師の、月見れば千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にあらねどの歌の如く蒼空に掛れる玉兔は唯一つなれと眺手の心により喜愛何れとも見らるべく、世界萬有は我心の有様を眺むる眺手の方により如何様にも見らるるとの意なり、一水四見の譬の如く此ヲ一アルも人畜等觀者の如何によりて何れにも見らるる如し、之を唯識所變と名く、犬犬たらす人人たらす假有にして實有に非ず、蓋し其實體なき證は吾人は悉く衰老に趣き病

患を得死して終に灰と化す亦千萬歳を得るものなし社界の事然らざるはなし。されど人言はむ萬物現に實在するを云何、之れ實有と思ふは誤れるものコツプも土塊なり何を實體あらむ。前來華嚴經を本として萬物は只心より起ることを述べたり。

この迷悟染淨只心より起るてふ義は自力宗に限ることにて淨土門の經説にはなかるべしと思はむ是れ然らざるなり、觀無量壽經に是心作佛とあり、是心とは見真大師の釋に依れば彌陀の本願を信する信心のことなり、是れ凡心ならず、三毒の煩惱の心中に南無阿彌陀佛の本願に助けられて極樂淨土に參ると信する信心一度起らんか此心は是れ迷の衆生が一轉して慈悲深き佛を作るも同じとの意なり。洵に吾人の心は日夜鬼をも造らむする様なれど如來の誓を信すれば此心中に悟の佛を造ると同じことなり。

猶ほ惟摩經にも説き深密經には最も詳に之を説けり可見。

次に最後の法華經涅槃經は同味の經なり。法華即ち妙法蓮華經八卷は只心の一字を説きたるものなり、天台の開山智者大師の書に依れば妙法とは即ち我心なりと云へり、その妙法は幽玄高尚なれば山頂或は海底にもやあらんと思へど、妙法即我心にして各自の方

寸中にあり、六凡四聖の十界は遠き物にあらず各自の心にあり、而してその心には余の九界を具す、即ち若し人間世界にて罪を作れば地獄を出だす、地獄出でたりと雖亦余の界を具ふ、又十界は循環して迷となり悟となれとも要するに我心を離れて迷悟無しと。以上佛教の大意なり。

之につき佛教はすべて迷悟浮沈皆我心より造り出すと立るものなれば未來の苦樂のみならず、今世にありても若し人道に背反する所行を爲せば監獄署に幽囚せられて苦痛を受けざるべからず。又道德を守り社界の實益を計れば朝廷より褒賞を受けむ、かく苦樂浮沈は來世を待たざる事なれば何卒佛教を單に未來のみの事とせざらむ事を望む。故に自身の精神の歸着を定め、其作用として道德の道を守り、國家の爲功を顯さば是れ佛教の本意に契ふ、之に由りて能く佛教の眞理を究め、之を行せば現世も來世も最大の實益あることを忘却すべからず。先

(第二回)

開會の日此論題を以て一場の話をした事であるが大体此の題は其範圍漠然として廣き事は海の様で云何なる事を申しても此中に攝まらざるものはないのである、此間は佛教の大意は云何と云ふに只心の一字を説きしものと云事を申ました一体此の大意と云語は天台の摩訶止觀には靈三括始終二冠三戴初後とありて大意と云はあらゆる物を袋の中に入れて口をしめ人か冠を冠れば其身体を覆ふ如く一代の教法の始終を云盡すを大意と名く即先日心の一字でも一切教法は何を説きしものかと云と其始終初後は心の一字に收まり盡る事が出来るのである。

今日は此題に就て釋迦一代の教法は云何なることを説きしやと云事を話し申さふと思ふ。語を換へて申せば、教相判釋と云ふべきである、法相では有空中の三時、天台では五時八教と云如く一切教の分類をすると云様なものです。此の分類法には諸宗に在りて種々に申す事であつて、上に云如く法相三論華嚴天台等と其宗々の分類法即判教がある。然るに今は道綽禪師の判釋に依て話さふと思ふ。道綽禪師の安樂集の中に一代の教法を聖道門淨土門と分けてあり、之れを聖淨二門と申すのである。此の聖道門は聖と云

のは大聖の義でありまして、所謂佛果菩提の事である。道は因道の義で佛になる道行きの意味であります。此聖道門とは娑婆にて證を開く事を教ゆる門。淨土門とは西方極樂に往生して證りを發く事を教ゆる門である。此の聖道門の中には大乘小乗の區別があります。其小乗云のは自分の生死得脱のみを本とするので、大乘の方は所謂自利々他と云て吾も人も共に生死得脱せんと云一段進んである教です。我國は此の小乗教は別の宗旨はなく、只他の大乘教と兼學せられてあるので俱舍成實等であります。大乘教は華嚴、天台、眞言、禪宗、法相等であります淨土門の中には淨土宗、淨土眞宗、融念佛宗、時宗等を含て居ります。

大体の明し振りは、聖道の法門は此土入聖と云ふて此世界で佛道修行して證の境界に入るのである。淨土門は此の界は惡緣多くして佛道修行は到底成就し難き事を知り、心に彌陀の本願を信じ西方に行きて證りを開かんとするのである。早く云へば此土入聖が聖道門他土得證か淨土門なり。委しく云へば聖道は自力でありて、我力を以て日夜に煩惱を對治して此の土で斷惑證理するのである。淨土門は此の土では煩惱を斷する事が叶は

ぬ故、彼土に往生して眞如法性を證るのである。眞理を證りた點は同じ事なれども其證り場所が此土と彼土と自力と他力と變るから、聖道淨土が分る譯である。聖道門は吾人の迷情にさからひ淨土門は吾人の心にさからはぬのである。恰も流れ河で舟に乗る様な物で流れに逆らへば非常に骨が折れる、流れに順へば樂なものである。手近い話が高瀬川を御覽なさい、誰れも皆善く御承知の通です、その聖道門には流轉門と還滅門とかある。流轉門は迷の方でありて還滅門は涅槃の本源にかへる方である。此の還滅門の方で煩惱の流れに逆ふて、進んで源までと骨を折るを聖道門と云のである、されど吾人の胸中に日夜流れ流るゝ煩惱の水は止めむとして、止める事はならぬ其流れ來る煩惱に逆らはすして、自分くの職業を働きつゝ彌陀如來の誓ひを信して、生れ付の儘にて淨土に生れて還滅門に至るを淨土門の教と云ふのである。

法然上人の御言に

「聖道門は智慧をさはめて生死を離れ、淨土門は愚痴にかへりて往生を遂ぐ」とある即聖道の方は世を捨て、智慧を磨き立て、迷の暗を破斥するを專とする方とす、

淨土門の方は彌陀の本願を信するには智慧を磨く必要はない。何故なれば即六字が即智慧でありてそれを與へらるゝか故に、只一文不知の儘にて本願を信して念佛するのみにて往生するが淨土門の意なりと云意味である。法然上人は智慧第一の上人と云て始めは天台にて自力の行を修したまひ、四十三歳にして淨土門に入り他力の念佛を弘めさせられたのである。

斯の如く一代教を聖道淨土の二門に分類して、今日の吾人にとりては自力聖道を捨て、淨土門に歸せねば往生し難しと云は安樂集の明し様である。此の源は龍樹菩薩の十住論の中に一代佛教を難易二道を判したることあり。是れが今の聖道門と淨土門の由りて來る根本なり。即聖道門は難行。淨土門は易行でありて修行し易し。其處で龍樹菩薩は行の難易を以て一代佛教を判し玉へり、その難行道を喩へて「陸路の歩行は則ち苦しきが如く」とある。陸とは險路なり此の險路を歩行するか如き自力の修行をして證に至るのである、此の證りに至るに就ては智度論に「智目行足到清涼地」とある。此の清涼地とは涅槃の證りの事である、清水の灘の邊りへ參ると今まで熱氣熾くか如き身も、忽ち涼

しくなる如く吾人の煩惱の熱惱も涅槃の境界に入ると忽ち消滅して清涼の證りの身となるのであるから、涅槃の事を清涼地と喩へたのである。其處で其涅槃の清涼池に至るには、智慧の目と修行の足を以て漸く達する事が出来るのである。今日の吾人には此の智慧の目が明かに見へるであろうか、修行の足か丈夫であるか。此の邊を思へば難行の難行たる事が分るでしょう。又その易行道を喩へて「水道、乘船、則樂レ如ク」とある如く、水上を舟に乗る程樂しき事はない。此他力の往生には智目行足なくとも大事なく、只彌陀弘誓の舟に乗して涅槃の彼岸に到るのである。此の意を和讃にも

龍樹大士世ニイテ、

難行易行ノミチオシヘ

流轉輪廻ノワレヲヲハ

弘誓ノフチニセタマフ

とあるか全く難行を捨て、易行を勧め玉ふより外は無い、斯くの如く龍樹は修行の點を以て難易とし玉ひ。道綽は之れを聖道門淨土門と成されたのである。以上を總括すると一代佛教は難行自力は聖道門。易行他力は淨土門と判別する事が出来ます。釋尊の一代佛教は廣しといへども、要する處此聖道淨土の二門より外はない。

されども斯く申すのも聖道門の教法と淨土門の教法との勝劣を論する譯では無いので
 す。故に其何れの法を修行して證を開くべしと云事は、諸君の意に任かさねばなりませ
 ぬ。諸君は其適否を善く考へて、聖道門で如法に修行の出來得る人は聖道門に依るか宜
 しいし、其修行か出來ない人は淨土門に入て易行道によらねばなりません。此の點は諸
 君か善く考へなさらねば不可であろうと思ひますも釋尊は應病與藥と云て、對手の
 根機に相應して説きなされたのか御一代の教法ですから、病人の吾人は其靈藥の適否
 を善く考へて。自身の根機に適當なる方を選んで服さねばなりません。(完)

念 佛 せ よ

佛阿難及び韋提希に告げ給はく。或は衆生ありて。方等經典を誦防せず雖も。多く衆
 惡を作りて慚愧ある事なし。命終らんとする時に。善知識ありて爲めに大衆十二部經の首
 題の名字を讀むに遇はん。是の如きの諸經の名を聞くを以ての故に。千劫の極重の惡業を
 除去く。智者復數へて掌と合せ。手を叉みて。南無阿彌陀佛と稱せしむ。佛名を稱するが
 故に五十億劫の罪を除く。
 (觀無量壽經)

信 之 說 (第一席)

赤 松 連 城 師

私は暫らく信と云ふ事を御話しようと思ふ。信といふにまことといふ所信とこれをま
 こととし信するといふ能信とがあります、すこし活字と死字との違ひはありますが。そ
 の義は自ら關聯いたします、佛法大海信爲能入とあるは能信の方、世間の民无信則不立
 とあるは所信の方である。先世間に於て信は必要であるか。此世の中で信がトレ程行は
 れて居るかと云ふ事は今日の道德問題の根本である。凡そ世は信なければ立たず。で信
 かなければ全世界は一日でも成立つものではない。

日英同盟は兩國の信によりて成立つて居る。此同盟でも一々疑ひかけたらば。少しも
 安心はならぬのである。之れは曾に同盟國に限らず。他の國との間でも必ず其交渉の上
 には確かに信が必要であるのです。現に目下我敵國として交戦して居る露國に對してさ
 へも此信を以て行かなければならぬ所がある。近く其實例を挙げますれば。先日我軍が

樺太に攻入りた時に彼軍務知事が。いよく甲を脱ひて我軍門に降ると申込んだ時に。いや、あーは云ふけれども實はわからぬせ。などと疑つて居たものならば。彼等を打ち殺して仕舞はねば戦争は止められぬ。従つて。イテヌ事に我軍人も損ねばならぬと云ふ様になるのです。相信する所から降伏もうけらるゝ宣なる哉信なくんば立たすだ。

實業家の如きは尙更信用「クレジット」か大事である。信用がなかつたならば。連ても世の中を歩く事は出来ぬ。何時もく損斗りせねばならぬ様になる。今日等も講習會が午前八時に始まると云へば八時に始まる。夫れを疑つて八時とは云ふけれども京都時間だから。まゝ九時か十時頃に行けばよいなんと思つて居る人は。キット損である。かく信は必要であるにも拘はらず。世の中を觀察して御覽なさい。

ドーです。世の中に信をわいて居る人は一人もないと申してもよい位です。但該にも「明日は雨降り。人はドロボーと思へ」と如何にも不都合な言葉ではありませぬか。人は信があるかは知らぬが。先つないものだと思ふて居れば間違ひはないのだとの警告である。試に世の中の人に信がどれ丈け行はれて居るかといふに。昔でも百人の中に三十人

も信の人はなかつたと見へる。夫れも諸君が昔の人は正直であつたと申して居るのであるから。現今の人の上に來ては殆んどゼロとなつて居るに相違はない。さればとて人が不信だから我も不信になると云ふ様になつて來ては。モ一世界は破滅するより外に道がない。人道が亡ふれば人界が滅するのである。國もあれば人民もあつても。信がなかつたならば其國は既に精神がない。亡ひたも同様である。

雲棲大師の言に「人道未だ全からず。イックンゾ佛道を知らんや」と仰しやつてあるから佛法を信する人はよく世間の信の大切なることを辨へねばならぬ。所が此頃は随分此信と云ふ事を云ひはやす様になつて來た。即ち信仰問題が。八ヶ間敷なつたが。たいいひはやすでは困る。流行と云ふ事は一時の事で。赤痢やコレラは流行は最悪ひが元祿式の後はなくなるものである。が信念の修養と云ふ事になると夫れが。只だ流行では役に立たぬ。信念の修養は云ひはやすのではない。眞面目に求めねばならぬ。信念の修養が積れば自然と世間の交際も誠になつて來るのである。夫れに世の人か偽つたから我も偽はる

と云ふ様では。悪人に感化せられたのである。悪人に感化される様では誠に残念である。露國が野蠻の行爲をするから此方も野蠻の行爲をすると云へば。日本が野蠻化されるので。ソ一なれば日本の光威は何處へか消滅して仕舞ふ。相手は野蠻であろうか。邪であろうか。此方はドコ／＼までも文明的に正しき道を通つて行て。是非共彼等を感化せねばなりません。されば世間の交りに於てはア／＼まで自己を中心として。自己の正否を省み。少しの疾しい所もなければ。其儘齋直に猛進するがよいです。

以上は只た世間の事に就てのみ申しましたが之れより少し佛教に於ける信の必要を御話し致しましょう。

佛教の信は世間の信より。一層深く且廣いもので。なか／＼得がたいものです。彼往生要集の中にも。假令佛法に遇ふと雖とも信心を生ずる事かたしと仰せられてあります。又

一代諸教の信よりも

弘願の信樂なをかたし

難中之難とときたまひ

無過此難とのへたまふ

と之れは大經の御語の御意であります。兎も角佛教の信を得るのは容易な事ではないのです。行誠上人の御話として何かの書物に書てありましたが。彼の華嚴宗の有名な鳳譚と云ふ人と同時代に物徂徠と云ふ有名な儒學の先生があつた彼徂徠は。大變な佛教嫌ひで。無茶苦茶にま一佛教の事を悪く云ふ。自分は物部大連の末孫だから。と云ふので擬家大連檄といふ一文をかいて。聖徳太子時代のかたき打ちを元祿時代にすると云ふ様な始末である。ソコで一日鳳譚は徂徠先生を訪ふて佛教の道理を聞かせてやろうとした。鳳譚は佛學に於ては其濫奥を極めて居るものだから。議論明晰一から十まで。口を極めて佛教の眞理を語りた。如何に徂徠も議論に於ては一言も出でず。最後になつて。御説はよくわかりました。如何にも御最であります。ソレでも私はドーしても信しませぬと答へたので。鳳譚も嗚呼縁なき衆生は度し難しとは此事だと落膽して歸りました。併し後に至り慧澄律師が此事を評してたとひ即時に信せずとも。他日の因縁位は生じたたらうといはれた。

食はずきらいでは困るが。きらいなものでも少しづつ食ふて見ると後にはすきにな

る様なものである。此講習會の中では信の薄い人はない様だが。學生などは佛教を試に研究するとか何とか云ふ考へて居るものがある。學校の中に起る青年會などには往々ソンの傾きがあつた。併し夫れでは。さきに話した鳳譚と徂徠の話の様で只た理屈斗りわかりても信せねば何の價値もないのである。乍去信するには因縁と云ふ事がなければならぬ。種熟脱と云ふて。種を蒔て置けば。キツト芽を萌いて實を結ふと同じ様に。佛法を聞くにも何が因縁となるかもわからぬから。マゝ理屈を云ふて居つても。悪口を云ふて居つても。チヨットでも佛法の席に列して居れば。夫れが因縁となつて信を得る事も出来る。要は只た道を語る人に燃るが如き信念さへあれば。人を感化するのである。説者に信なくして。聽者に信を起さしめんとするのは無理な話である。よろしく説者聽者共に自ら省みねばなりません。宜なる哉信なくんば立たずだ。信のある人であれば必ず活きた働きが出来るに相違ない。

横濱に或豪商があつた。其家の主人は佛教信者であつたが其子息は。少しも佛法を信せぬ。父なる人はドーしかして。子に佛法を信せさせたいと。いろ／＼心を碎くけれども

一向所詮がない。之れはモ一モト何様か大徳に御相談するに如くはないと。心を確めて其頃芝の増上寺に居られた。行誠上人が最も大徳な方だから先づ彼の方に御願ひしようと思ひ付き。態々行誠上人を御訪ね申して。事の由を御願ひ申し上ると。行誠さんは。佛法でも縁なき衆生は度し難いが。一體其子か何か好きであるかと御尋ねになつたら。父はヘイモ一誠モトに御耻かしい事ではありますが。獵がすきでありますので。日曜の日とかならんどか休みになれば。必ず自分の深川の別荘の方へ出掛けて其池の魚を獵るのが仕事でありますと御返事をした。すると行誠さんはソレなら私は夫れを見に行かふと。日曜日を約して置いた。そこで其父は行誠上人を御招待申して歸りて居ると日曜日に其別荘に子息が例の如くヤツて來た所が。御座敷に妙な僧侶が居る。エイいま／＼しいと思つたが自分は獵をしに歸つたのだから。相變らず池の端に行つて獵をして居る。行誠さんは主人を呼んで。彼築山に毛氈を布け私も行つて見ようと。申された。これはなか／＼我々の眞似の出來ぬ事である。僧侶が獵を見ると。誠に不體裁な事である。若し修飾をする人であれば。心には見たいと思ふても。態と其處をさける様にするのが通例であるのに

行誠さんは熊と見に御出になつた。子は獵をしながら。妙な僧侶さんが来たわいと。其人の方を時々見ながら。獵をして居ると。ドイ云ふものか其日に限りてチヨットも獵がない。ものだから其子はモイ怒つて仕舞つて歸つた。行誠さんは平氣なもので。縁なき衆生は度し難しと仰しやつて。御寺に歸られた。

其後其子供が大病になつて。父のすゝめによりて。佛法を聞く氣になり。彼の深川の別荘で見た和尚さん(行誠上人)に遇ひたいと申した。之れ其時に一言の法話もきかなんだが殊勝なる相を見たので因縁を結び。遂に彼頑冥なる心にも彼和尚さんに遇ひたいと曰はせたのは。實に行誠さんの信仰の方が感化したのであると申さねばならぬ。かくて行誠上人を聘して臨床の法話を願ひたれば。かの子供は郭然として大悟したとの事である。されば鳳譚も徂徠に必ず因縁を結んだに相違はない。して見れば此講習會に列席の方も此機會を因縁として是非共信を生して貰ひたい事である。既に信を生ず。世間の信は自ら得られるものである。此信の獲得に就ては次に御話致します。

第二 席

前回には世間の信の必要を説きます内に時尅を費し佛教の信を疎へませなんだ故今回は前回の遺漏を補ふつもりである。世間の信と佛教の信とは信の意義は同じけれども廣狹淺深の同じからぬことは同日の談ではありませぬ、それについて信を生せしむるには種々の方法があります即ち三周説法と三量知とが對照して居るかど考へます、三量知の現量と比量と聖教量とで現量は眼に見耳に聞き直接に知る事で少しも疑ふ所はありませんが現量で直接に知ること出来ねば比量で知る。比量とは山を隔て烟を見る早くこれ火なるを知るといふ様なもので、烟より推して火を知るのを比量と申します。さて聖教量とは佛經にかくの如く説てあるといふので、信を生ずるのであるが先年西洋の某學士と哲學の談を致しましたる時事物を研究するに直覺(インスタント)比較(コンパラチーフ)歴史的(ヒストリカル)との三つがあると申しました。

その時私は是は三量知とよく合すると思ひました。直覺は現量にあたり比較は比量にあたります。聖教量と歴史的にあてますれば、歴史は即ち事實を書きあらはしたる者ゆ

へ、これを以て話しますれば疑を去ることか出來ます。そこで三周說法に對照しますと、法說譬說因緣説の三周で、第一の法説はありめのまゝを説くので、これを信するは直覺又現量知にあたり。譬説は法説では信じ難い者の爲に他の事に比し、譬喩を以て説く是が比較又比量知にあたります。

譬喩は人の知る所を以て知らざる所を推知せしむるので、常に見聞する所を以て未だ見聞せざる所に於ても推して信を生せしむるので、元來世の中の人には常識を以て事物を判斷する。そこで佛教の所説も常識に合はねば之を否認し、來世有無の問題などもこれを常識に訴へる傾きがある。宜なる哉非常の言は常人の耳に入らず。抑常識といふものも時により人によりてその範圍がかはる。昔し常識已外に措かれた事も今日では一般常識の範圍内に屬することになりてある。しかれば今日常識の及はぬ所であるからとて、これを疑ふてはならぬわけである。

さて因緣説は譬喩比例を以ても、了解せぬ者の爲に因緣即ち事實を説き示して信を生せしむるので、是か所謂歴史的にあたると思ひます。私が英國に居ました時、或人問ひますには。汝は幽霊「ゴースト」を見たことかありますかと稍冷笑を帯びて居ましたから、私はこれに答て本國日本にては見たことはありませんが英國に参りて始て見ましたと答へました。するとその人大に驚きまして、それは何日の事で處はいつこ晝か夜かと申しますから、場處は倫敦の大寺ウエストミンスターアベイにて白晝にこれを見ましたと答へたれば。その人更に驚きそれはいかなる形狀なりしやと尋ねます、からかの大寺にある有名古墳墓貴族某の遺言に依り、骸骨が劔を揮ふてたのれの像を刺さんとするかたちを作りてあるのを見たと言ひましたれば問ふたる人は苦笑して止みました。この貴族は人の妻を奪ふて其夫を殺したれば、疾にかゝりその夫の幽霊にせめられた故、後代を誠むる爲にかやうの像を作れよと遺言したとか申すことであります。これは歴史的因緣説の一例に申したまでです。

これは話がわきへそれましたが信の字の本にもとりて話していただきます。信はまこと即ち眞實で、是は所信の方その信を向ふに認めます故此方に疑なくこれを信する、即ち能信まこととするのである、信の字に死字と活字名詞と動詞のあるは歌を歌ふといふ

如く。上の歌は名詞にて下の歌は動詞、歌ひものを聲にあらはすのである。信を信するといふも同じわけで、所信の信じものを此方の心にうけとるゆへ所信が眞實でなければ疑なく信する心のねこらぬ。

そこで迷信といふは、自語相違で迷ふならば信ではない。信すれば迷ひはないと申す人もあります。しかし世に迷信といふのは向ふのたしかならざることを眞實と心得あやまりて信するので、信する人は迷ふては居らぬ。それを他の不眞實と認めたる人より迷信と評するのであります。

しかればその眞實といふは、いかなる事かと申せば。先人の言行に就て申せば心にねもふこと、口にいふ事と口にいふ事と身に行ふことと、所謂言行忠信表裏相應みな一致するのを信と申します。つら／＼人體の組織を見ますと、郵便局に受信課と發信課である如く、他より受取る官と他に發現する官とがある。眼と耳とは受信課で眼は人の行を見て受取り、耳は人の言を聞いて受取る。さて口に言ふことは人の耳にきかる。身に行ふことは人の眼に見らる。視聽と言動が二つづゝ相對して居ります。心は郵便局長で

双方を主宰する、そこで相交はる者が心口各異言念無實でありたならば、詐偽を以て人に對し疑惑を以て之に報ふる。まことかないからまことするものがない。

佛教に示したまふ言行忠信表裏相應なればいかにしても疑ふことは出来ぬ佛陀は言行相違失したまはず三業相應して衆生を濟度したまふ故に衆生これに對し見佛聞法するもの必信を生するのである今回毎日諸君かとなへらるゝ三歸依の文自ら佛に歸依し法に歸依し僧に歸依するとある佛は眞實なる故に衆生これを信じ法は眞實なる故に衆生これを信するさて最後の僧寶はごふであるかこの佛法僧の三寶を上にした三周說法にあてゝ見ると佛を直に見奉ることかなはぬ故に法によりて佛の境界を推知するは譬説にあたる其道理をも猶信しかぬる者あれば因縁事實を以て信を生せしむるこれ僧寶のたふとき所以て起信論の開首に如實修行等とあるを僧寶と申してあるいかにも醫者の働きの効能は病氣の上に顯はれた事實か證據となる佛は大醫王にして應病與藥の法を授けたまふその法の効能は如實修行と教の如くこれを信じこれを行しこれを事實にあらはす故これに接する者かならず疑惑なく信するのであるしかれば僧侶は三業相應して心の佛心に住し行

は佛行を行し言行一致の信を守らねば人をして信を生せしむることは出来ぬ。

これは僧寶とはいへど出家にかきらぬわけ故に四部の弟子比丘と比丘尼は出家なり優婆塞優婆夷は在家なり今日此會に列せらるゝ諸君も自ら信し人をして信を生せしむる信の一字に注意ありて世間の信用欠乏の時態を救ふことに勉められんことを希ふあまり信の説を述べましたことに錯雜いたした話して御きゝとりにくいことゝ深く恐縮します。

信に復二種あり、一には聞より生ず、二には思より生ず、是人の信心聞より生じて思より生ずれば名けて信不具足となす。復二種あり一には道ありと信す、二には得者を信す、是人の信心唯道ありと信じて、都て得道の人ありと信ぜざれば名けて信不具足となす。
(涅槃經)
信は是れ佛の子なり是故に智者は常に信に親しみ近くべし。
(寶積經)

◎七佛通誠の偈(第一回) (文責在筆者)

藤島了穩師

此文は四分律中に有り、七佛に就きて過去或は當來の彌勒菩薩を加へ八佛とする説あり七佛とは戒本序文に曰

- 一、毘婆尸佛 二、尸棄佛 三、毘舍佛 四、拘樓珊提加佛 五、加那加尼佛 六、加葉佛 七、釋迦佛

とあり。各偈を説くは七佛略教誠偈中にありて四分律より抄略せるものなり。廣く説けるものは凡ての經文に渡りて、之を簡略にせるは七佛略教誠なり、其中の一が諸惡莫作衆善奉行自淨其意見諸佛教にて、通誠とは衆生も菩薩も上は佛より下衆生に至るまで皆悉く一般に之に由りて教誠せられ之を實行せざるべからざるものなるか故。教は教授、惡を廢め善を爲す。誠は戒飭、進んで善を爲すべきの意。此文は羅什の舊譯によれば諸惡莫作衆善奉行自淨其意是諸佛教にして新譯によれば一切惡莫作、當奉行諸善、自淨其

意、意是則諸佛教、なり、

此偈は二十字或は十六字なれども四句の偈中に含有せる意義は廣大無邊、釋尊五十年八萬四千の法門此中に攝在せり、之を實行せば諸佛の教誡を實行することならむ。

嘗て唐白樂天が一鳥窠禪師に遇ひ佛教の大意を問ふ、禪師示すに四句の偈を以てす、樂天稍激して曰く三尺の童子も之を知りと、禪師曰く然り三尺の童子も之を知らずは易し八十の老翁も之を實行するは難しと、流石は白樂天もこれはく感心致され辟易の色あり、之より終に厚く佛教に歸依せりと。されは簡單なりとて蔑視すへからず。

最初の二句は啻に出世の教のみならず世間普通道徳上にては此通り行へば上乘なり。惡とは總て他人に妨害を與へ困却に陥らしむる所行也。善とは人に益を與へ人を救濟する所行是也。此二句を約すれば人の行ふべき二大徳行と云ふ可き也初の句は義にして後の句は仁に當る、之を換言せば初句は人に害を加ふる事勿れ、第二句は進んで人に善を施せとの意。されど仁と義とを發する根源には慈悲あるを要す。人の性惡と善との説あり孟子は善、荀子は惡なりと主張せしが又善惡混淆也との説行はる、佛教にては人の性は

善惡混淆と爲す、人の心中には慈悲心姦惡心利己心等ありて善惡混淆の如きも其根本には所謂慈悲あり。之を發達せしむれば仁となり義となる也。善事を爲すに就きて義が第一と爲る。希臘の賢人セネカ曰く世間惡念先發して善念繼起する者人々皆是也故に惡念始に起り次て善念起ると、或は然らん。孟子の説ける如く凡て人は天然善なり只外物に誘はれて惡を犯す事猶ほ鏡の外物に蔽はれて曇るが如しと云へども善道を行ふには努力を要する事多大なるや疑なし。佛教上にては慈悲利己心加害心惻隱等は人の具有する所なれば即ち最初より如斯きもの人心に具するゆへに惡を爲さず善を行ふべしと教誡を加ふるなり。之に就き第一は不義を戒む、義はジャスティスにて消極的なり、人に害を加へ人を殺すへからずの意也、不義は積極的にて人に害を加へ利己心を發達せしむるが如きは皆不義心なり。要するに諸惡莫作は消極的なり。世には人に害を加へず又他を救助せず以て一箇の完全なる人と爲せる者多し、されどこれのみにては菩薩より進んで佛と爲るを得じ、或は社界の文明を進歩せしめ難からむ。西洋にて往昔の教は義か一方なりき、ソクラテスは高德の人弟子を能く薰陶せしかど其教は義に止りしなり。後に至り

善を行ふべきを主張したるは基督にして愛を説き進んで人に善を行へと即ち仁を説き泰西の文物を益せし功偉大なり。獨逸にシヨツペンハウエルなる學者あり自ら戒律を嚴守し西洋の佛と呼ばれしが今より百年前既に東洋の書籍殊に佛教及吠陀を研究し梵語に堪能にして當時佛教の大意に通せし人なるが耶蘇教の功業は愛を説きたるを以て最とせり即ち此時迄は義の一邊消極的なりしを基督は積極的方面を加味し以て西洋德行上一大發見を爲したるもの也と言へり。されど東洋にありては少しも珍とするにたらず、釋尊は已に慈悲を説き一切有情は虫類まで救ふべしと。又吠陀は慈悲を言ひて一切衆生を愛すべしと説けり。孔子も仁を説き進んで身をも殺して仁を成すと。然るに耶蘇教の愛は人類に限定せられて他の動物に及ばず、禽獸は人類の爲めに造られたるものなれば之を殺戮するも道徳上何等の害なしと。蓋し彼の愛は佛の慈悲に及ばざる遠しと可云。獨逸語には萬物皆男性女性中性と各々性を定め而して人類と他の動物との間には大なる區別を立つ。是れ他の動物は人の爲め神が造りしとの證なりとせり、シヨツペンハウエルは之を駁撃して是れ耶教僧侶がことさらに造り出せし者にして初めより人畜の間に區別ありしものに非すとせり。西洋には今より百年前に動物保護會社起れり、夫は耶教にては動物を虐待する傾あるを以て之を禁止せんか爲にて、やがて耶教道徳の不完全を補ひたる也、東洋にては此必要ない釋尊已に殺生戒を説きて一切有情を殺すまでは嚴禁し玉へり近來東京に動物保護會なるもの結ばれしは佛教の衰頽せる一證乎。佛教徒たるもの可愧。

東洋にて釋尊既に諸惡莫作衆善奉行を説く、衆善奉行は仁之が中心と爲りて起る、仁は吾人の心中に慈悲を有すれば也。其善を爲すに當り此は善彼は害を考定するは理義に明かなる頭惱を要す、故に之を實行せむには諸惡莫作よりは智力に待つや大なり。されば男女の別によれば義の行は男子よりも女子僅少にして、仁は女子よりも男子少し、實際は其證乏しからず、西洋にては男女同權なれど女子は生理上理義の點を辨別するに劣れり、虚言を吐くは女子に多く裁判所の申立を調ぶるも明かなり。然るに善事に就きては男子劣れり女子は感情に富し見聞の事物皆情を激動す、故に慈善事業などは女子に適切なるもの、一なり。

◎現時の信仰問題

近角常觀師

序 説

ゲーテ氏は曰へり、智識の文明は進歩を成すも、人間は終に何處までも人間なりと、然り、故に信仰もまた人間の信仰なれば、時間の爲めに變はる可き筈はなし、乍去物久しくして弊を生ず、恰も川流の源泉は清澄なるも、其下流に至つて漸く混濁するが如く、人間の信仰を培養供給す可く起りし宗派も、亦た後代に至りて漸く弊害を生ずること、宛ながら川流が源泉を距る漸く遠くして混濁を來すが如く爾り、此時に當りて一大偉人の出現するに會へば、彼は形式的宗派の間に在りて種々の工夫と經驗を重ね、終に久しくして佛陀の光明に接すること、恰かも濁流に棹して溯流する久しくして清澄の源泉に達するが如し、源泉の一掬の水は能く人の餓腸を醫して甘露の美味に鼓舌せしむる如く、佛光に接する人は佛陀の慈愍の攝取を味ふて始めて人類の眞價は信仰の有無によ

りて定まる妙用か悟了するなり、蓋し之れ此の經驗なくして徒に信仰を口にするの徒は下流の濁水を嘗めて源泉の甘露を揣摩するが如し、豈に遺憾の極みならずや、生や昔し學校生活の當時斯題の上に苦悶を感じ頭々反側實に幾回たるを知らざりき、而かも斯の混濁の下流に扁舟を弄しつゝの間なりき、其後漸く得る所ありて前の苦悶は變して今は佛陀慈光に歡喜する身と化せり、要するに苦悶は入道の序門なり、往昔大聖釋迦牟尼世尊が妻子珍寶及王位を捨離して遠く山中深林の間に遁れ玉ひしも、畢竟生老病死の四問題が大苦悶の動機となりし結果にあらずや、今や信仰界の同人漸く繁を加へ、慰安を宗祖親鸞の遺族に求むるもの目を逐ふて多々ならんとす、他方は兎に角として生が現在地たる東京に在りて、聖人の歎異鈔に感歎の聲を洩らし、教行信證に至心歸命の信を獲るもの續々たるは、聖人の遺教か時代の推移と共に益々活動を現すを知る、去れば今にして現時の信仰を問題として茲に滿腔の研究を試む、蓋し急務中の急務ならずや、故に生は這回招かれて此處に來り諸君と相見するに及んで、講題を現時の信仰問題とし是を四段に別つて向ふ四日間の講話を試みんとす、則はち實驗的信仰を第一として第二に罪惡

の救済を辨じ、第三に絶對的他力を論じ、第四に横超涅槃を以て局を結ばんとす、諸君乞ふ之を諒せよ。

實驗的信仰

願て近世過去の佛教界を見よ、人は多く哲理の研究に心酔して徒らに高尚の理想を論釋の上に求め、敢て俯して自己が信仰を實地に應用試験せんとする輩は有らざりき、然れども大勢の一隅に止らざるは古今の通則なれば、爾來佛教研究の人士等も實行に難き理窟に厭きて、逐次實驗的信仰を追求せんとする氣運を造れり、是に於てか時機相應を以て興起せる、我親鸞聖人は宗旨の明治信仰界の頭上に、赫灼として大光明を放つことゝなれり……諸君よ宗派を知らんと欲せば先づ内容を知らざる可らず、内容を知らずして宗派を叫ぶ、終に皮膚の信仰のみ、眞髓に透徹せざる皮膚の信仰にして、豈に無盡の妙味を嘗むるを得んや、特に注意す可きは信仰の上には閑問題を容れざるの一事なり、昔日佛の在世に當りて數論師派の學士等、世尊に問ふに種々なる哲理上の難問題を以てせ

り、爾時世尊は虎號一呵して告げ給はく、汝等愚人よ、汝等此處に毒箭を負へる被害者あらんに、夫れの看護者は應急の治療を施さんとはせず、悠々寛々として、其毒箭の製作方や、其毒性の組織分子等の研究を始めたらんには、其被害者たるものは、此等研究の時間中に於て遂に毒力の侵蝕と負傷の苦痛に堪へかねて悶死するを免れず、宛も汝等は毒箭に中てられし負傷者の如し、何んの餘地ありて所問の如き閑問題を試みるの暇あらんやとて諄々教訓し給ふもの積んで一典をなす、名けて箭喻經と云ふ、而かも此等の愚人は今日に至りて猶ほ續出止まず、毒箭を被むる蝟の如く、中毒既に全身を徧かれんとして尙ほ悠々として不急の閑問題を弄して得色あるもの、蓋し信仰を談するだけの儕輩比々爾らざるはなし、豈亦佛說箭喻經の罪人ならずや。

乞ふ看よ佛世尊の修行が二大行に成立せるを、曰く降魔、曰く成道、宗教は終に現實問題なり、某なる者會て森田悟由禪師に問ふに、臨終と後生を以てせしに、禪師は言下に直下殺到し來らば乃はち奈何と反問し、以て生死の大事は豫備的或は試問的に講究する如き閑問題にあらざるを喝破せられたりとかや、今亦た然り信仰を求むるの上には眞に

分秒の間隙とも興ふ可らず、吾人は實に生死の巖頭に立ちて其宣告を聴つゝある身の上なればなり……理窟信仰の時代には先づ首めに自分免許の理窟を以て妄想の佛を造り夫を中心に種々の理窟を拵へて之を莊嚴するを例とす、余も明治二十九年より翌年にかけて、自己が學生時代たるにも關せず學事を拋棄して宗教の事件に奔走せしが爾來身心大に疲勞して且つ疑問百出、平素の安心また消へて迹を留めぬ時代を迎へたり、此際に在りてや前に自己が妄想の上に製造せし理想の佛も更らに來りて苦悶の我を慰藉する勞を執らねば、結局は晝夜寤寐に如何にもして此の苦悶を打明け此の苦痛を分ち呉れる可き親友も有らずや杯と、頻りに慰藉者の出現を熱望することとなりしが、元來折角製造せし佛でさへ顔を出さぬ境遇に在りて如何でか此の要求を同じ人類の上にて満すことを得んや、之に於てか懊惱終に病を爲すに至りて、哀れむ可し此の玉緒も不安苦悶の中に絶へ果てなんとせり、此時に當りて突如として眞個の同情者ありて絶大の慰藉を我が前に捧げるに遇へり、是れ即ち佛陀なり、何んとなれば自己が自己の大罪人たるを自覺し乍がら、之が救濟者を發見せずして苦み悶へたる余は、佛とは大悪人を救濟する方なり

と信じて疑はざるに至りて、始めて空氣を吸ふ人類空氣を知らず、水中に在るの魚水を見ざるが如く、由來佛光に浴せる我が之を悟らすして徒らに、自分勝手に妄想を描き來り、一時姑息の無理安心など構成せしものが、何んぞ知らん矢張佛光の裡に斯様なる兒戯を弄し妄想を重ねつゝありしことに想到しては、始めて冷覺自知の妙味を掬して、佛恩報謝の念油然而勃興して復た禁する能はざるに至れり。

罪惡の救濟

欺異鈔第九章には

念佛申し候へども踴躍歡喜の心ねろそかに候事又急き淨土へ參り度心の候はぬは如何にと候べき事にて候やらんと申入れて候ひしかば親鸞も此不審ありつるに唯内房同じ心にてありけりよくよく案じみれば天に踊り地に躍る程に喜ぶべき事を歎ばぬにていよく往生は一定と思ひたまふべきなり

とあるからには、如何なる罪惡も佛力によりて救濟せらるゝことさらに疑ひある可らざる

るなり、在昔王舍城の阿闍世太子は父王殺害の大逆を犯して王位に陞ると雖も、聽て良心の阿責に會ひて後悔の念禁じ難く遂に全身惡瘡を生じて心身共に大懊惱に陥りし時、母后韋提希夫人に對し、抑も此難病たるや一に己が罪惡の意業より起りければ、今更尋常肉體のみの疾病の如く、人力藥餌の能く救ふ處にあらずとて、先非を追悔して懊惱堪へ難き有様なりき、爾時に當りて臣下中六人の哲學者は王の煩悶を慰藉するため代はる替はる伺候せしに、其一人なる日月稱と云へる人先づ王に向つて發言して曰く、大王此疾は身體の痛苦なりや將た心意の痛苦なりやと、時に王は之に答へてア、余は今身心共に痛苦せり、之れ曩に誤つて無辜の父を害したる弑逆の罪報の致す所なりと、時に日月稱之を慰めて曰く、王請ふ憂ふる勿れ睡眠は貪るほど眠むく酒は飲むに隨ふて量を増すなるよ、王も亦た然なり、王は罪報を恐るゝ愈深くして苦悶益深し、王希くは地獄の惡相を念ふ勿れ誰れか一人の往いて實檢せしものありや云々と、日月稱は實に斯る語を設けて王を慰めんとせり、然れども斯は之れ空見外道の唱ふ所彼等の所信は過去もなく未來もなく、死せば大風に灰を撒きたるものゝ如く觀すと雖も、新る根據なき淺見の所信

の如何で絶大苦悶の逼迫に責られつゝある阿闍世王の慰藉に直せんや、是れ但に日月稱にのみ限らざるなり近時我國の學者中又此邪見の學派あり、一年有半の著者中江兆民居士の如き、天人論の黒岩周六氏の如き、亦日月稱の亞流たらずんばあらず、後進の徒平素の藏書に於て誠箴せざる可けんや、次に日月稱に代りて王に見へし藏徳となん呼べる哲學者なりしも、其失敗は日月稱と同一なりし、次に實徳なる者は父王殺害の原因を父王自身の宿業に歸して論辨し又た悉知義は往昔羅摩王以下父王殺害の例を擧げて、阿闍世の意を強せんと謀り吉徳は更らに無靈魂説を擔ぎ出して草樹や大根を斫るも人類を殺すも同一なりと論じ、更らに無畏所なる人來りて諄々として快舌を鼓し、以て王を苦悶の渦中より救出せんごせしも、終に何等の効を奏せざりき。

此時賢相耆婆大胖伺候して曰く、大王夫れ快眠し得るやと、時に王は我誤つて正法の父王に加ふるに惡心の弑逆を以てし今や報應身心を惱亂して呪願醫藥更に効を奏せず、朕聞く身口意の三業清淨を失ふ時は、必ず墮獄の報を受くと、況んや朕は父を殺すの大逆あるに於てをや、是を憂懼して日夜二六に轉頓反側す、何んの暇ありて快眠の安を得ん

やと、悔心唇端に震ひ至誠言貌に動す、時に耆婆之を見て化縁の漸く熟するを念ひつゝ、王に多大の同情を表し乍から徐に述べて曰く臣聞く世に二善あり能く衆生を苦悶の裡に救ふ、一は曰く慚、二は曰く愧、慚は自己の罪を拒き、愧は他の罰を排す、大王洵に既に弑逆の罪あり、然れども王は自から劍を執つて父王の肉體に加へたるにあらず、故に弑逆と云ふと雖も間接の殺業は其報に於て自ら輕きものあらん、且つや狂人の所爲は之れ不論罪なり、王眞に佛は大慈悲なり順逆共に濟ふ王何んぞ世尊釋迦牟尼如來に就て其大慈悲を仰がざると、時に虚空に聲ありて曰く、世尊は久からずして當に涅槃に入る可し、汝何んぞ速に佛所に詣て、其救を希はざるぞ、我は之れ汝が父頻婆沙羅なり、汝決定して耆婆の言に順ひ他の邪見者流に聽く勿れと、阿闍世此語を聽き畢りて體中の毒瘡一時に劇苦を發し方に悶絶せんことを、爾時佛耆闍崛山に在しまして此事を知ろし召し、忽ち哀愍の大光明を放ち王の身邊を照す、其時王が全身の疼痛倏ち止んで身體輕快し佛を慕ふの念一時に爆發す、世尊大衆に告げて曰はく、一切の衆生若し無上道を得んと欲せば先づ善友を得るに過ぐるものなし、阿闍世王若し一人の耆婆を亡つせば彼は來月七

日を期し定んで無間地獄に墮したらんにと、阿闍世王は耆婆の勸告に其心を動したる時空中の靈告と佛の光明に接する奇瑞を得て、歡喜の念禁し難し則ち倉皇城中を出て、疾く佛所に詣る、時に世尊王に告げて宣はく、一切衆生所造の罪業總じて二種あり、一には輕、二には重、意と口とに依て造る罪は輕しと雖も身口意の三業を具して造るものは甚だ重し、今ま大王は父王殺害の罪ありと雖も未だ身樣を以てせしにあらざれば其報隨ふて亦た輕るし、而して其輕罪中狂人の犯罪は無論不論罪に屬す、是に四種あり王の犯は罪其貪慾狂に所屬せり、恰も酒に醉ふ人醉中種々の惡爲を做すと雖も、醒後之を懺悔すれば他又た罪とせざるが如し、王も亦た爾なり、若し強て王に消ゆ可らざる罪科ありとせば、諸佛如來は亦た王が殺害の罪業を幫助するの罪科を脱れず、何んとなれば王の父頻婆沙羅は其昔諸佛如來に歴史して之に供養せる功徳に因り今世に國王の家に生れたり、而して異日王を生むに及んで王は國と位を貪求するの結果、即ち貪慾狂に陥りて遂に狂病の故に父王を殺したり、若し父王に諸佛供養の因なくんば今世に國王に生るゝの果なし、國王に生るなくんば王は亦た國と位を貪求するの情を生せず、蓋し三世徹

觀の諸佛にして此過失を爲す、殺逆の罪科豈に單に王に止まらんや、故に王にして地獄に墮す可くんは諸佛も亦た俱に墮獄せざる可らず、佛陀にして地獄に墮す豈に眞の所應ならんや、是に於いて知んぬ諸佛は定めて王を墮獄の途に救濟するを、王尙ほ自家救濟の上に疑慮を存するや否やと、時に阿闍世世尊の慈説を聽き忽焉として不安の暗黒界を出て、慰安の大光明界に入れり、歡喜極まる所を知らざりしと。

絶對他方

阿闍世の如く、結局自分の一身上を考へて苦に病み、遂に自分の本質より何事も善くは行かない、其最後に究はまる時に云何なる事を考へしや、阿闍世は佛に逢ふて佛の慈悲と自分の無能を知りて得しに非らずや、之を名けて信行開發と云、之れを信卷には信行などある元である。

之れは何よりかくなり來りしや之れ佛より賜りしなり、御本書の上に云何に高祖が表はし給ひしやと云に、今云ふ佛の慈悲は云何其佛とは云何と云はく、そは慈悲とは願力也

佛とは阿彌陀佛なりと云事は今の青年輩は之を善く知れり。此の義理は善く了知せり、されど只其義理を知るのみにして、信仰てふ點には極めて冷かなり、それでは一向何の味もない事なり。宗教に於て信念とか信仰とか云ふものは、決して左様なものではなきなり、實際に涉て之を實驗して、此の味を知りしものでなければならざるなり。實驗的に觀經に顯はれたる、韋提や阿闍世の一件を、曇鸞、道綽、善導、等は皆之れを實驗に徴せられしなり。鸞師は其著書の時に當り、鬱々として三十三天を見て、仙術を習ひ、後又之を棄て、觀經を續み、遂に實驗して之れを信せしなり。綽和尚も同じく實驗なり善導大師の書振りに至ては、實に其實驗たる事は明著なり。此等の人々は支那であるが日本の法然上人と雖も、此の徹であるなり。彼れは求法の念存りにして、一切經五度まで、繰返くて拜見せしと雖、一も得る處なかりしなり。最後に善導大師の散善義を繼て、彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受して疑なく慮りなく彼の願力に乗して、定て往生を得と信すると云文に遇ふて、廓然大悟と實驗の極終に、此の名號を念じて佛陀の不可思議力を信じたるなり。法然上人の念佛は決して理屈ではなきなり。それ故其念

佛を掲ぐるや、宇内の者皆之れに歸したるなりき。次に我高祖至るを、最初は比叡山に入りて天台の觀法律戒修行をも修せられて居りしが。扱て實際自分の心の暗は去らず、始終苦悶ばかりに日を送り、遂に其極六角堂の籠りとなり、法覺上人の指南によりて法然大和尚の本に行かれて、遂に衆生の助かるべき法を聞いて、安堵せられたるなり。法然上人は南無阿彌陀佛往生之業の一句を聞くや、佛の慈悲願力の廣大なる事を證り。念佛とは斯くするものなりとか、斯の如きものなりとか、段々理屈を推して以て得られたるには非ず、至は實感せられたるなり。即嘆異鈔に云云せる如くなり、行と雖も自分の行に非らず、皆佛の行なり「彌陀ノ名號稱へッ、信心マコトニツルヒトハ。憶念ノ心ツチニシテ。佛恩報スルオモヒアリ」とある如く、自分か稱ツ、モ自分の行に非らずと自行の効には目を觸れ給はざるなり。阿闍世の信も佛力の反動なり、御本書には淨土くと云へり、之れは大無量壽經が根本となるなり、此の大無量壽經は一切經隨一の大經に非らず、彌陀の本願は即此の大經にして、一切經の根本なり。一代の教法は皆之の大經の中に攝するなり、即此の大經は功德を含有せるものなり、此一切經を含有せる大經を

尙一層約むれば如來の本願即名號となるのである。だから行卷には一切經此の名號の外になしと云へり、故に御本書には

念佛を法然上人より聞きし處に、信の起るものなり、故に信を至心信樂欲生と釋し玉ひ信は誠なりと云者にして、即佛の外なきなり。かるが故に、行が信を出さる可らず、諸君等は佛とは阿彌陀佛なり、其阿彌陀佛は慈悲のかたまりてあると云事は、知つて居られても、實際に掛からの故に、少しも難有味を有せざるなり。

不_レ得_外現_{賢善精進之相}内_壞虚_假

之れは散善義の至誠心釋なり、此の訓點は至當なるを、高祖は亦不_レ得_外現_{賢善精進之相}内_壞虚_假と訓し給ふなり。斯く點の付け處にて、意味大に異なる事となる、されど其問題は扱て置き、外に賢善精進の相を現はし内に虚假を壞かされとの事に出來るか否やと云ふに、之れは中々の大問題なり。

高祖の身上に就て之を云ふと、最初は戒律を保たれしと云何にしても淨心に成り難く、戒を保つ後からく染心起り來りしにあらずや。高祖てさへ然り、増して況んや泥凡夫

の吾人か外に賢善の事が出来得るや、少々覺かなき話なり、私も今信仰の話をして佛の道を説て居て、外貌一寸精進の様に見るが、純粹潔白とか清淨とか云ふ事は出来ない。其中には名利とか、何處が難れる事は明かなり。眞宗大學の或る學生にして、一夜掃除の夢を見たり、即舍監の命により、室の内外を最も清潔に掃き清めて、扱て舍監の檢閲を請ひたり、舍監來りて書函を開きしに、中には積塵山の如かりしと、之を見て今の學生は大に驚くと共に、塵埃の盡さる如く、人の身も罪惡は盡きさるなりてふ事を感じて夢醒め終りたりと。問題は之れなり。我は罪なり、云何に清からむとすとも、いかでか盡くる事があらむや。

信卷には、一切群生海自_レ從無始_レ己來乃至今日至今時穢惡汗染_レ無_レ二_レ柔心_レ一_レ虛假詔僞無_レ眞實_レ心_レとある。

されは不得_レ外_レ現_レ賢善精進三相_レ内_レ壞_レ虛假_レと云ふ様なる事は云はれざるべし、たから高祖は外に賢善精進の相を現するを得され、内に虚假を壞けはなりと點し玉ひしなり。これ絶對他力の現はるゝ處なり、何處までも人間は虚假不實の塊なり、佛心を得たる時

は内心誠になれりといふは決して本統でない事なり。我れは無能不實なる事を聞きたる時に、信を得るなれば決して自か心が誠になる筈なし。大經に不生欲覺瞋覺害覺乃至勇猛精進等と説けるに非らずや。されは如斯云へば、佛の誠を仰く外なきに非らずや。されば散善義に須眞實心中作とあるを高祖は眞實心中に作し玉ひしを、須ひよと點し玉ひしなり。以此みれば佛の慈悲は、他力の力の外には何事もなきなり。如斯我心に浮ひ出てたるか信行開發と云ものなり。此の信行開發して眞の信樂は起るなり、かるが故に最早や信すべし信せねばならぬてふ語は、自然不用となるなり。信せさらむとするを、信せずには居られぬなり。如斯き説き振りなれば、高祖は自分信樂を欲すも佛の方に付け玉ふなり、之れ全く絶對他力を表はさむか爲なり。

現時の信仰に自ら二途あるなり。一は佛様くと云ふて自身建立の佛で自分の心にて假定せし佛なり。如斯佛であるから平生はいざ知らず。苦しみの場合には、其佛は何處へやら隠れて仕舞ふなり。是れ他なし、假想々像の佛なればなり、又一方は實行的理想的な生活とても云ふが如く、是ては佛の御意に叶はず、之れにても迷ふと様に、佛を觀想と

して自が行爲を夫れの方に近付けむとするなり、即佛は理想の佛なり、之れも此の理想通り行ひ得るやと云へば、決して左右美く行くものではない、其處で此の二つ共各實行し得ざる事を發見するなり。されば今云佛と云のは、自分罪惡の極なり、塊なりと信して佛を仰きたる家に、實の佛を信するを得て信心を得る事が出来るなり、彼の假想理想の二派は今日出来たものではない、遠く觀る此の事が書てある、それに配合すると假想の佛の方は定善十三觀に當り、理想の方は三福九品に相當するなり。即散善なるものなり現時の青年も、此の定善散善の道程經路を経て、遂に苦悶して其結果自分の罪惡を信して眞實の信に入り、實際の佛の味を知るなり。是れ佛を知ると共に、自分を知りたるなり定散が一轉して、弘願眞實に入りたるなり。

されは、觀經の定散自力の觀法は、現時青年信仰の手本を出し得るなり、高祖が不得外現等を點破せしは、實に勝手なり。常格を離れたるものなり、本典にも論語を常格を脱して、勝手なる訓點で引てあるか、これ等は皆自分の信仰より、割り出して文字まで常格を破らるので、何と其信仰の手強い事か知れるであろう、それだから、肉食もし妻帯

もし僧俗共に佛の前には、一體にして之れを救ひ玉ひしなり。之れ釋尊か印度四姓の別をなくされし、本意を表はされたるものなり。又一方法然上人も、高祖と其信仰に至ては、皆一味なり。自分も弟子も、平等主義なるを表はし玉へるなり。之れ絶對他力に非らずして何ぞや。此の義を以て横超他力の言は、出て来るなり、此の義を以て程度なく皆々同一の眞如平等の證に入る事を得るなり。

横超涅槃

凡そ佛教を信する經路には、數多あれども要するに左の二者に攝せらる、

一、宇宙に眞如なるものあり、眞如は萬物の眞相なりとし、我は是れ佛なりと爲すもの。

二、自身は罪惡の塊なりとし、佛陀により救濟せられんとするもの。
之を親鸞上人は曰く

豎出

豎超

自身は佛、此界淨土と認むるは堅也。外に佛を求め未來極樂に往生すと云ふは横也。蓋し此は佛一代教の分類法の如く視るものあれど然らず、上人が實驗的信仰の眼より湧れ出でたるもの也。而して又現時の生きたる問題也。出とは漸次に、超とは極速に行く事也。

現時の青年か達せんと欲して煩悶せる信仰を觀察するに吾人は佛と共に常に在りと思惟せざるべからずと爲す者に非んば、吾人は佛を鏡として一步づゝ之に近づくべしと定むる者多し。前者は自ら心中に佛を憶するを得ざるが故、佛を造り出し之に依りて安慰を求めんとす、之れ自の思想により佛を作れるもの即ち假想の佛也。又後者は佛を鏡として之に向ひ進まんと努むるか故に畢竟現想の佛也。前者は實的にして觀無量壽經の所謂定善の機に非すや。後者は戒的にして所謂散善の機なるや明けし。定善散善と言はゞ古問題の如けむも現時の實際問題なるを奈何せむ。案出したる佛は必ずや程度あらむ、限りある智慧もて作られし理想佛亦程度ある事必せり、更に言を換て之を説かば假想の

者は靜觀なり、觀想の者は實行也。吁此二者終に絶對の安心を得るや否や。

假想——定的——定善——靜觀

理想——戒的——散善——實行

觀經には韋提華夫人の求めに依り佛は假想佛の觀法と様々の戒行を説示せられたり、要するに此兩者共に信仰に程度ありて即ち九品の別あり、既に程度あり死後生する淨土亦九通無かるべからず、業因千差萬別なるが故に淨土亦同しからず、之を化土と名く。

然らば世尊何が故に如斯き化土を説かれしや、夫は定機散機は吾人本來具有せるもの佛は之を憐憫して眞信に導かんが爲之を説く。同一の信仰に入るは佛の不思議を信するの外なく、疑惑和讃には佛の不思議を疑ふ様を述ぶ、即ち佛智不思議に依り助けらるゝを解せざる爲に疑ふ、佛が見えず、佛の絶對の光を觀するが故に花に含まれて佛を見奉らず、此花開きたる時に眞實の淨土往生を遂ぐるなり。故に極樂には階級なし、善信房の信心も法然上人の信心も同一なり、されば赴く所も亦異らず。一切衆生男女老少を撰はず信仰の味は同一なり。元始佛教にても其證を認め得べし。

かく區別なき有様を。涅槃と呼び最後のもの也、又真如とも云ふ。真如一如、實相とし云へば哲學者は宇宙の本體とし事物の真相なりと解す。然し信仰に入りたる者は肉體を離れたる時に極樂淨土に生れて涅槃の證を開く。此證より報應化の三身に姿を顯して衆生濟度を計る也。如來は此證即無上佛に爲さんと誓ひ給へり、無上佛とは形も姿もましまさずとあり。吾人の助けらる、佛は如上の法身に非ず。世に信仰問題數多かれど佛の眺方に由る、或は佛、或は真如、と觀る。親鸞上人の佛は教行信證の後に眞佛土卷ありて、光明無量壽經無量是也と即ち慈悲の塊、智慧の塊に外ならざる也。未來極樂淨土に就きては從來其觀念稍明確ならざりしが、こたび父の訃に際して至幸にも現今の位置よりは層一層難有く樂しきものなるを忘れざるに至れり。洵に罪惡の塊たる肉體を捨て未來安養の淨土に生るゝは無上の極致と可云。

◎時局と佛教

(文實在
筆者)

藤島了穩師

時は時日、局は局面の意、其時其時に當りての局面にて何時にても時局とするを得へし必しも現今の日露大戦争の時に限らざるなり。佛教上にては佛は諸惡莫作衆善奉行自淨其意是諸佛教と説かれたり、殊に誰人も守るべき五戒の中殺生戒は虫一匹殺すも惡しと、然るに戦争を爲すには萬物の靈長たる人類の生命を奪ふ、是れ佛教の本意に背反せるに非すや、然り佛教の趣意に従へば國家の義務に應じて劍銳を取り敵の生命を奪ふは當を得たる者に非ず、されどこは平和の時なり、時によりては所謂一殺多生一の暴虐を殺し多數人を活かすが如きは豈に佛教の本意に非すや。

抑露國は世界の公道を無視せる者なり、日本は土地を侵略し名譽を博せんとに非す畢竟世界公道の爲彼を膺懲するなり、即ち一殺多生論を殺し平和を維持するにあり、故に我

天皇陛下は不得止開戦なされたるは詔勅に炳焉なり、故に義戦なりと可云。

往昔世尊在世の時舍樂國に國賊起れり、時に國王之を討せんか佛の戒に違ふを恐れて其由を佛に伺ふ、佛即ち如是如是とて允可せられしとなむ、蓋し悪人を討するは多數の善人を救済するか爲のみ。涅槃經金剛心品には世尊の過去生を説て曰く、吾嘗て國王たりし時國中の賊を對し奮闘し滿身に傷を蒙むりしが今其功德に依て佛果に登ることを得たりと。

今回の戦争は決して佛の本意に背かすと言ふべきも其戰端に就きては吾人佛教徒は甚だ遺憾に堪へず、佛の眼より視ば日露何れの人民も一子の如く平等一視なり、佛弟子か佛誠を奉せしならむにはかゝる戦争は起らざりしに之に背けるが故なり、戦争の起るは隙あるか故なり、恰も人髓に腫物生せしか如く療治の爲干才を執らざるを得ず、此時に當り因循姑息之を忽緒に附せば國家倒れん、一旦は苦痛を感ずともやがて健康體に復すべし。

抑く病の發する原因は平生衛生の足らざる爲にて今回日露戦争の起りしも、我國は隙

きがありしに由ると謂はざる可らず、戦を未發に防ぐべき準備の具はらざりしに基く、古言に曰兵凶器也戦、危道也天道惡之然不得已而用之亦天之道也と今回の戦争も亦所謂不得止なり、開戦以來年一年有半連戦連捷なるは固より 天皇陛下の御威稜に因るとは申しながら亦五千萬同胞の義勇奉公に由らざるはならず、古人又曰く百戰百勝は善之善なる者に非ず君子は戦はずして敵を屈す、たとひ百勝を得も味方を損ず金錢を費やさずして勝つ能はず、不戦而屈敵の計りに出ざりしは返へすくも遺憾なり今日にては平和克復まで戦はざるへからず、吾人は之に對する覺悟を要す、財産も擧げて身命を擲けて其目的を達せざる可らず。

然るに今日は世上の形勢稍倦怠の色見ゆ、一外人評曰萬歲の聲も漸く少くなれりと、誠に適評なり、よし一旦平和を得とも彼は僭土重來再戦を欲せむ、彼や今日我國人が想像する如く閉口し居らず、元來露人は世界各國中最も頑強なる人種にて、今より百五十年前露西亞中興の祖ヒーター大帝は忽ち烈帖木兒等の來襲攻略に由り疲弊せる後を受けて天性聰明なるを以て先政に學はんとて蘭國に入り軍艦を製造し航海を練習し後に佛英に

遊ひ其學者を聘して國に歸り大に國政を改革したり、此時に當り武功赫々なる瑞王チャールスト十二世と戰端を開き敗して國境に迫らる、群臣悉く平和を望むも聽かずして曰く朕は瑞王を師として戰を學びつゝあり弟子必しも師に優らざるに非すと、敵の戰法を知り能く學び遂にチャールスを破りて之を土耳其に追ひ込み戰ふこと三年最後の一年にチャールス討死せしも露は之が爲勃興しヒーターは中興の祖と爲れり。之に依て露人は皆ヒーター的教育を受け頑強なり、ナポレオンと戦ひ土耳其英國と争ひしも未だ土地を割き償金を出せし事をあらざるなり。

如斯忍耐より成立せる露國と戦へる吾國人は忍耐力を要するや勿論にして、生命も財産も老幼男女盡く舉げて最終の勝利を必せざるべからず。若し物質的比較を爲せば日本は到底及ばすと雖小能く大に勝つ其例も亦なきにあらず。在昔スバルタ人種は小國と雖武勇絶倫にして大國と戦ふて全勝を占め大に彼れ「スバルタ」人は強健なり、男女國家の爲身を捨つるを辭せず、嘗てヘルシヤと戦ひ、出征せる一卒母其友の負傷して戦地より返れるに遇ひ光其敗如何を問ひ次に我子の安否を訊ねしに國家の爲名譽の戦死を遂げたる

由を聞きて直ちに刀を抜きて自及せんとせり、戦友は之を押止めて曰く何の故に自殺を謀り玉ふやと老婆答て曰く我老ひて七十を過ぎ縦令ひ生存し居るも國家の爲めに奉公する能はず然るに我今生き残り居れば反て國家の厄介物となりて彼れは何某しの遺族よと云ひて政府より扶助金等下附せらるゝなれば取りも直さず夫れ丈け國家無用の冗費なり故に我々の自殺は反て國家に奉公する所以なりと遂に自及せり如斯き精神ありて能く

彼斯百萬の大軍を追返せり、かくて波斯の百萬の軍に勝を得たりと。
 本年一月十五日豊前小倉に於て將に出發せんとする一兵卒に向ひ其母誠めて曰く「先に
 行つて待つて居れ、私は後で行く、天皇陛下と如來様とに對して不都合な死に様をして
 はならぬぞ南無阿彌陀佛を忘れてはならぬぞ」是れ平生の覺悟宜しければなり未來の觀
 念に明かならされは出來ぬ、我子の出立に涙を流がし甚しきは遺族が扶助料を區役所へ
 催促に赴くが如き者は慚死して可なり、何時死しても可なりと覺悟は出征者に限らず其
 父兄も之を因縁として定め置くべきなり、死は戦時平時を撰ばず、死處定かならず、壯
 年と雖決して忽諸に附すべからず。

終に臨んで更に一言せん抑も戦争は銃丸砲聲の真中干戈相見ゆる時のみに限らず、吾人は生れながら戦闘しつつある者にして或者は病と戦ひて打死し或者は學問と奮闘し、商人は商戦を爲すが失敗して打死せると云ふべく、又云何なる戦争に勝を得とも只一つ必ず敗を取るものは無常迅速の敵是れなり。吾人は六字の名號を信するにより縦令浮世の戦争に破れて四大和合の肉體を捨て、安養淨土に生れ歡示極りなき勝を得る不思議の救あれば之により必敗の後必勝を得て涅槃の域に凱旋するの榮を得るは全く彌陀他力の本願を信するの一念に在り豈に愉快の事ならざるや。

念佛の功力

南無阿彌陀佛をこのふまは	四天大法もろともに
よるひるつねにまもりつゝ	よろづの悪鬼をちぢけず
願力不思議の信心は	大菩提心なりけまば
天地にみてる悪鬼神	みなことごとくおそるなり
南無阿彌陀佛を稱ふまは	十方無量の諸佛は
百重千重圍繞して	よろこびまもりたまふなり

見真大師

◎談話一片

野々村直太郎氏

今日は求道難に就て、永たらしく話そうと思ひましたか時間の都合で變更しまして、茲に一話があるそれを話して責を免れましょう。其話は諸君善く御存知のて、彼の真宗強信者の庄松同行の話です、大體今日は通して佛教は難信難行たる事を云はむとせし人間か、真宗の話をするのは變てはあるが、その事は止めたのだから。真宗の話でも善しと致しましょう。御存知の通り、庄松は古人である、其生國は四國でした、而して世にも稀れなる難有い同行でありまして、彼の興正寺派の者です、何故か非常に近在の人々より崇められたのです。

確か明治初年の事でありますが、或る他の信者か、或る僧に自分の信心を申出て、其よし悪しを聞きしに、それにて結構なりとの答を得、また他の僧に同じく尋ねしに、それにては悪しと云ひしかば、其由を庄松に語りしに、庄松の謂く甲乙兩僧は各其云處異な

るは當然なり。其二僧が極樂を有せざれば何を云やを知るべからず。賊の事を聞かむと思へば、本院の極樂を有する佛ならざれば、到底能はざるなりと答へしとぞ。
又庄松或る處にて、病氣に懸れり、同行達は大に氣遣ひ漸く庄松を其家にまで携へ歸り扱て「庄松よ安心せよ汝が家に歸りたれば」と云ひ遣りければ、庄松の答に「何處に行くとも極樂の次の間なり」とぞ。

此れは禪家にて云も他力門にて、其も極樂の次の間なり尙次に正松か臨終の辭世の言葉あり「正松汝死しなは立派なる石塔を立てむ」と云ひしに、庄松徐ろに「我れ死ぬるとも石の下には居らざるぞ」と答へたりとぞ。

一休禪師の辭世に

われ死なばどこへも行かぬこゝにをる、たつねてきてもものはいはぬぞ。

一休禪師は自力門の人なるか、故に如斯云はれしものにて其意を體すれば、庄松の「石の下には居らぬぞ」と同じ事で、而も其言葉の變て居る處か面白いのである。同じ春に逢ふても柳は緑花は紅なり、之れを無理から柳も花も同一の色にする必用はないのである。

る賊に之等をは生きたる教とも云ふへきてあろうと思ふ。

道元禪師か、北條時頼に與へられし歌に、こゝろいふのがある「あら磯の波もるよせぬ高岩にかきもつくへきのりならはこそ」。

此の道元禪師といふ人は、五年の間支那に留學して、歸朝後建仁寺や宇治の黄檗山に入り、後に永平寺に入り。終に其開祖となつた、大徳である。扱て此の歌の意味を、一口に云へば、不立文字と云ふの外ないのである。和歌てふものは婦人文學で、壯嚴なる事は云ひ得ないと云ふか此の歌などは實に莊嚴なものだ。大磯や觀音崎さては鎌倉などの海岸に彼の、勇壯な大波か打寄せて、大岩にブツツカルが岩はビクともせず、其高さも高さゆへ、波は届かないから、牡蠣か付く事が出来ない。それと同じく崇高なる此の法も、書き表はす事が出来ないと、云歌の心である。實に此の間に法味油然として、汲み盡す事が出来ないのである。此の事は禪宗のみでない。眞宗も皆然りである。大體禪宗の病とも云ふへきは、佛法の事はいふ事が出来ぬが、されは言ふ事が出来ないならば心理學的に思ふ事も出来まいと云へば、いやそうではない思ふ事は胸一杯なれとも、文

字に顯はされないのたと云、そうすると此れは死佛教と云はねはならぬ、思へは不思議なり、人間の言語は實に重寶なるもので、胸の分別は直ちに言語とか、文字に顯はし得るものなり。然るを言へぬと云ふのは、何故か思へないからであらう。釋迦は五千餘卷の經を説けり、此れ太平洋の大波なり、禪家では之れを釋迦様の「ヘド」だとして居る而して其五千餘卷は、釋迦自身煙として死せり。之を一字不説と云へるなり。佛法は不思議なり、佛法は吾人を極樂へやるか、地獄へやるかは知らざるなり、親鸞聖人は一切存知せずと云ひしに非らずや。此の事に就て一語を思出せり、予の少年時代に母より聞きしものなり。

去る處に兄弟あり、兄は其弟を愛せり、然るに其弟大病に臥したれば、兄の心配一方ならざりき、一日弟の山の芋を好む事を思出し、種々色々に難儀苦勞をして、漸く之を得て興へ以て其心を嬉はしめたり、其時弟の思ふには實に好き芋なり我にさへ斯く興へしものなれば、兄は定めしより多く美きやつを食せしならむと確信して。兄の寝る間を窺ひて、之を殺したるに其腹の中には、黒しき屑芋のみありしとぞ。

さあ！此處だ如斯、高祖の腹中を解剖せなければならぬ、高祖の腹中定めて何かあたろうか、いざ解剖して其屑芋てさへもないのに、驚かなければならぬたろう。いや何一物もない事は明かである。誠に奇なり、實に不思議なり、然し不思議なるか故に、易なる譯であろう。實際佛法は思へざるものなり、成程と手をたゞきて合點するものてない、昔も今も之れを得むとして、如何なる難事をも、願みさりし人は幾人もある。されは吾人など之に對して大に奮發せなければいけない。大に求道をやるへし、然し最も一言して置く事は釋迦も高祖も、眞に胸中は無一物である事である、それだから高祖も不思議くと云はれたのである、全く思ふ事が出来ぬからなのである。

余死すれば汝等はアブアラは死せりて泣かぬ。爾まど安んぜよ。

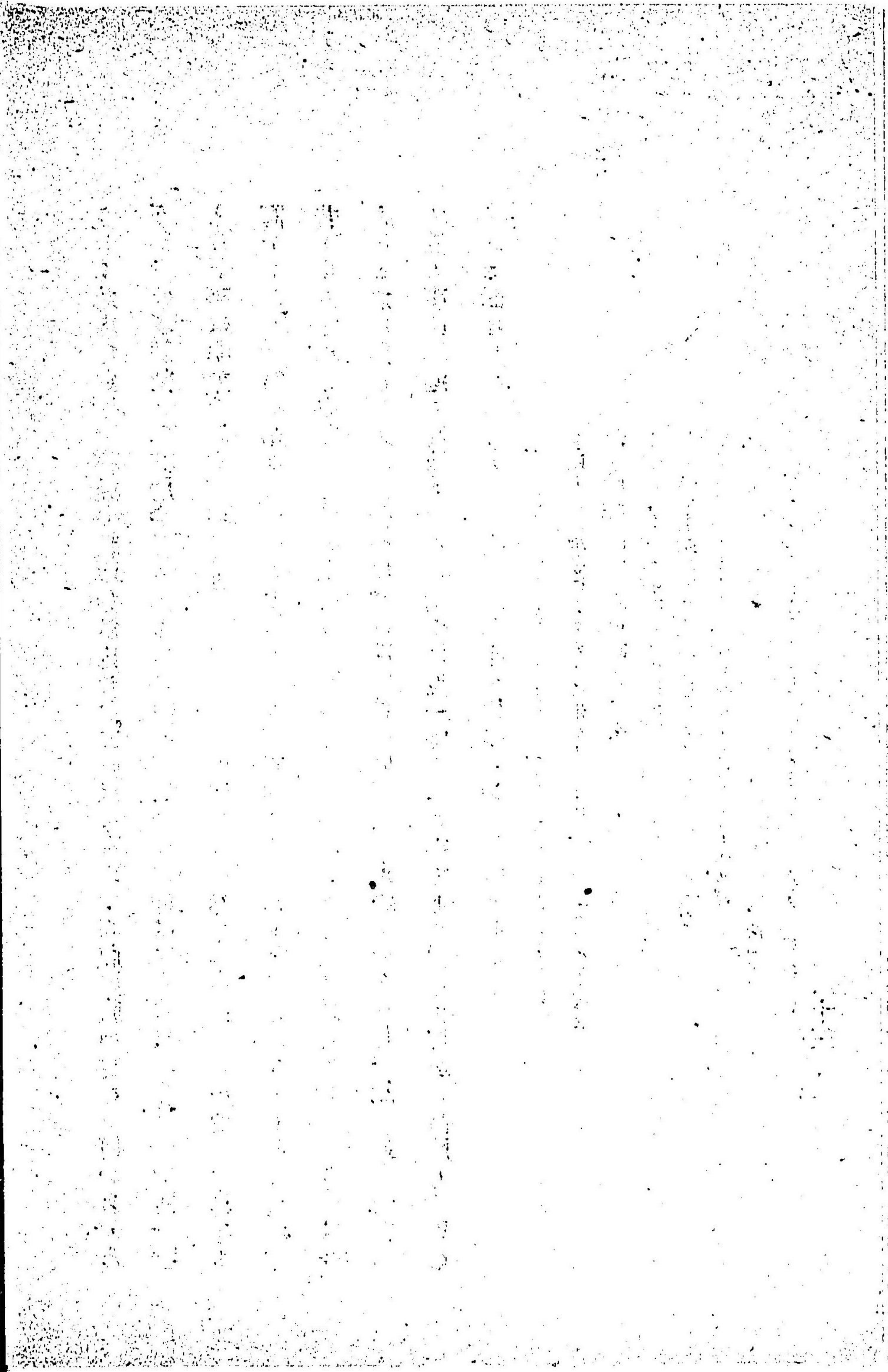
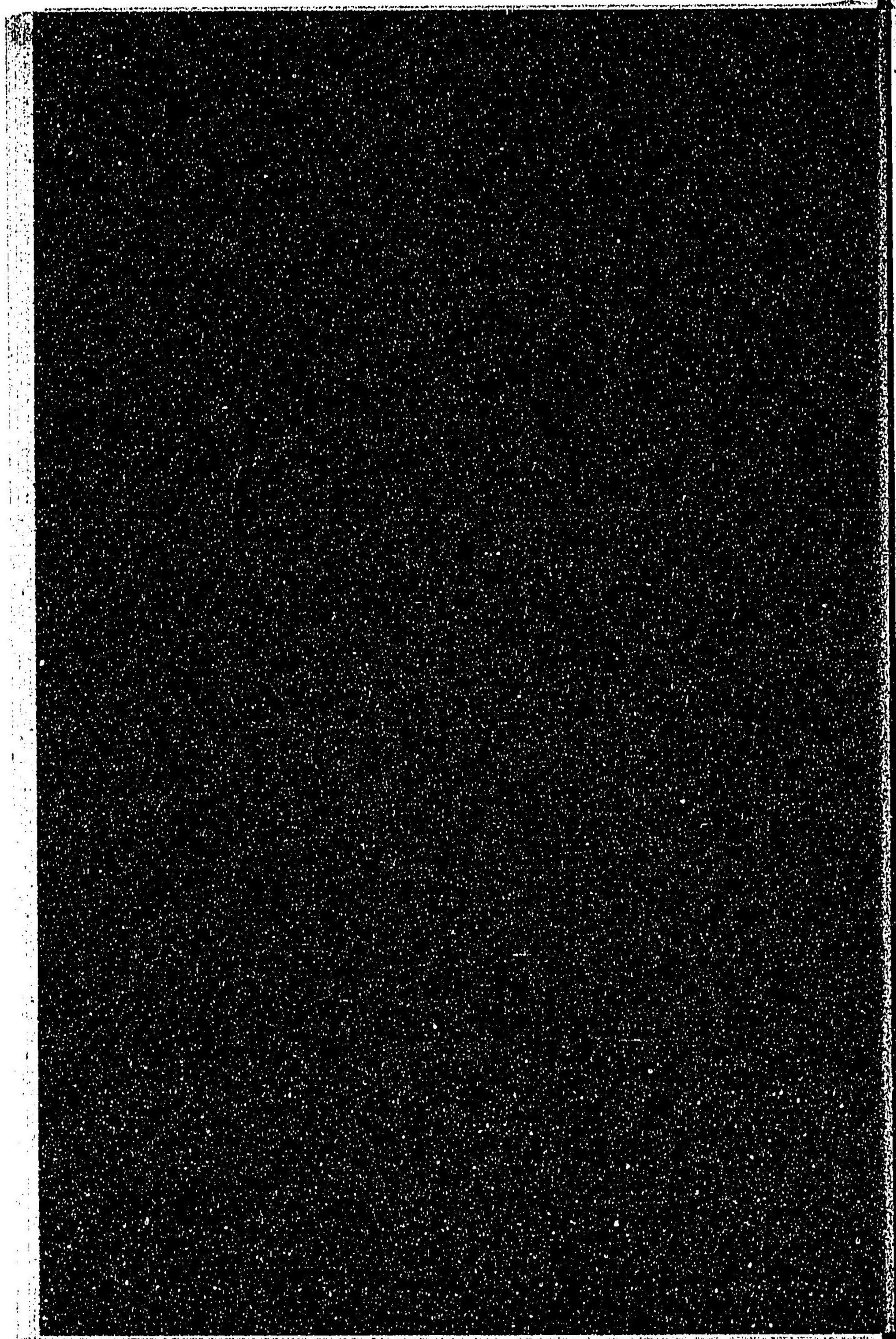
汝の前に横はるは余の骸なり。余にあらず。アーノールフ

本來もなき古への我なまば死にゆくかたも何れかもなし

わら樂や虚空を家と住居なして心にかゝる空さへもなし

いづるとも入るとも月を思はねは心にかゝる山の端もなし

一休和尚



京都市聯合 夏期講習會記事

如來の示導に敬順して正に開かれんとする
 常市の佛教青年會夏期講習會は。東六。法
 藏館の一室に於て漸く種子を下されんとす
 吾人は。多大の希望を以て開か成立の一日
 も速かならん事を祈れり。かくて第一回の
 協議會を開き二回三回の後。幸に事實とし
 て現せらるゝを得たり。乞ふ其日程を記さ
 ん哉。

△七月二十日 (第一回協議會)

決議事項

- 一、開催に決す。
 - 二、京都市聯合佛教青年夏期講習會と命名す。
 - 三、經費は有志者の寄附を仰ぐ事。
 - 四、時日 八月五日より一週間。
 - 五、會場 長光寺又は建仁寺。
 - 六、講師。
 - 七、聯合團體。
 - 八、賛成團體。
 - 九、應講、自由、但應講券を發行す。
 - 一〇、風俗を亂さざる事。
- 以上

委員の分擔左の如し

- 一、會場 松本豐城
 - 二、發起團體 柏木徹。藤澤乙夫、
 - 三、賛成團體 四村七兵衛
 - 四、會計 四村七平
- 當日の出席者(イロハ順)は左の七名なりき
 兩四村。柏木徹。松本豐城。藤井實。藤澤乙夫。
 佐藤。

△七月二十三日(第二回協議會)

- 一、會場 建仁寺山内禪居處
- 二、時日 八月五日より一週間
- 三、時間 午前八時より同十時まで
- 四、講師
- 五、夏期講習會臨時講演會日割

八月六日 油小路花屋町	淳風會館
七日 河原町四條上ル	了徳寺
八日 新寺町正面上ル	即現寺
九日 堀川綾小路上ル	常念寺
十日 佛具屋町魚柳上ル	佛教團體會
十一日 姉小路堺町四入	商業學校青年會
十二日間ノ町五條下ル	報徳會
十三日 中珠敷法藏館	常葉青年會
- 六、豫算梗概

A、收入豫算
B、支出豫算

委員の出席せるもの拾名(イロハ順)以下
下總て之に倣ふ

兩四村。羽栗。木多。柏木徹。並山。松本雪城。
藤井寛。藤澤乙夫。佐藤。

△七月二十六日(第三回協議會)

出席委員

兩四村。本多。柏木。河邊。並山。松本。藤井。
藤澤。佐藤。清水

決議事項

- 一、諸般の實行準備に着手する事。
- 二、案内狀
- 三、張紙及開催交渉。

△八月三日(第四回協議會)

出席委員前回に同し。

- 一、支出額 再豫算
- 二、借用品概算(會場に要する)

第四回協議會に於て準備は既に完全せり。
かくていよいよ吾人が渴望する當地聯合青
年會の夏期講習會は。洛陽東山の名刹建仁
山内の禪居庵に開かるゝに至れり次第左の
如し。

京都市聯合佛教青年會講習會

(第二日)

△八月五日 宿雨晴れ一天拭ふが如し

本會發會式執行

▲式次

- 一、一同着席
- 二、開會の辭 藤井寛
- 三、禮讚文 吉谷講師發聲一同合誦
- 四、唱歌(如是我聞) 常葉婦人會少女合奏
- 五、來賓總代祝辭 菅龍貫師
- 六、聽講者總代祝辭 神戶發吉
- 七、委員總代謝辭 松本雪城
- 八、來賓演說 彌經九師
- 九、講話(佛教大意) 吉谷講師
- 一〇、唱歌(法の深山) 少女合奏
- 一一、閉會の辭

▲餘興

- 一、尺八 (開門喜) 樋口孝道
- 二、抹茶 常葉婦人會員

當日は特に式場を裝飾し。門前には六金色
の旗を交叉し。其兩側には赤白の幔幕を打
廻らしたれば、仙境の美觀確かに人目を聳

動せり門を入れれば來賓、聽講者の昇降口を
別にし。更に進めは講堂は抱牡丹の白幔幕
を打廻らし壇上には。麗はしき花瓶をさへ
据へ。來賓席、婦人席、講師席、新聞記者
席。喫煙所。休憩所等用意甚だ密なりき。
△來會者 約三百餘名 來賓者五十餘名な
り 午前八時開會午前十時三十分閉會す。
△八月六日(第二日) 天候更に清し。
午前八時開會 十一時散會(聽講者約三百
名)

- (一) 信の説 赤松連城師
- (二) 人生と信仰 大須賀秀道師

△臨時講演會(同日夜)

- (於油小路花屋町上ル淳風會館)
 - (一) 信の説 赤松連城師
 - (二) 偶感 名和淵海師
 - (三) 講演會に就て 柏木委員
- 午後八時開會同十一時閉會。滿堂立錫の地
なし

- △八月七日(第三日) 快晴 藤島了穩師
- (一) 七佛通誠の偈

- (二) 佛教大意(續) 吉谷覺壽師
 - (三) 佛教の國家的功力(續) 吉谷無隱居士
- 午前八時開會同十一時閉會(聽衆如例)
△臨時講演會(同日夜)
(於河原町四條上丁德寺)
- (一) 開會の辭 宇佐美委員
 - (二) 國家と宗教 松本委員
 - (三) 戦後商業と信仰 大須賀秀道師
- 午後八時開會同十時閉會(來聽者堂に滿す)
△八月八日(第三日) 晴拭ふか如し
- (一) 七佛通誠の偈 藤島講師
 - (二) 佛教の國家的功力(續) 吉谷無隱居士
 - (三) 現時の信仰問題(其二) 近角常觀師
- 午前八時開會同十一時三十分閉會(聽講者
如例)

- △臨時講演會(同日夜)
(於新寺町正面下ル即現寺)
 - (一) 開會の辭 藤井委員
 - (二) 佛法不思議 近角常觀師
- 午後八時開會同十時散會(講衆堂に溢る)
△八月九日(第五日) 晴天

(一)時局と佛教 藤島了稔師

(二)罪惡救済(其二) 近角常觀師

午前八時開會午前十一時散會(聽講者如例)

△臨時講演會 (同日夜)

(於堀川綾小路上ル常念寺)

(一)開會の趣意 柏木委員

(二)信心開發 近角常觀師

午後八時開會同十時散會(聽衆堂に洩る)

△八月十日 (第六日) 快晴

(一)絶對他力(其三) 近角常觀師

(二)雜話 野々村直太郎氏

午前八時開會午前十時散會(聽講者如例)

△懇話會 (同日講習會引續き)

(於河原町四條上ル了徳寺)

(一)求道の用意 近角常觀師

(二)雷と宗教 野々村直太郎氏

▲餘興

松本委員の新案になる問號問答は一段の風味あり満堂の兄弟抱腹絶倒して快哉を叫べり

筑前琵琶 (廣瀬中佐、刈萱道心、綴引)

鳥居喜登子女史

午後四時散會 此日炎熱酷しく汗油衣袂を浸せしも洗心の德音は。天來の妙樂と相應して身心俱に爽然宛然涼風に座するの感あり。會するもの一百有餘名極めて高潔なる會合にてありたり。

△臨時講演會 (同日夜)

(於佛具屋町魚棚上ル圓徳會)

(一)開會の辭 佐藤委員

(二)我信念 廣陵了賢師

(三)現當の利益 赤松連城師

午後八時開會同十時散會(聽衆滿堂に洩る)

△八月十一日(第七日)(終會)天氣 爽晴

(一)信の説 赤松連城師

(二)横超涅槃(其四) 近角常觀師

右終りて閉會式舉行

▲式次

一、一同着席

二、開會

三、委員總代謝辭

四、聽講者總代謝辭

松本 委員

菅 龍貫

五、會計報告 西村 委員

六、講師告辭 赤松 講師

七、禮讃文

八、閉會

▲餘興

○福引あり當撰品は左の如し

一、佛教聖典十部 東京三省堂

一、書籍十六點七十部 興教書院

一、同五點三十部 顯道書院

一、同十七點百八十一部法藏館

以上各書店よりの寄贈なり。

△臨時講演會 (同日夜)

(於姉小路界町四入日本佛教法話會場内)

京都市立商業學校佛教青年會

(一)今夜の講演 松本委員

(二)信仰の趣味 大須賀秀道師

(三)光明中の生活 近角常觀師

午後八時開會同十一時散會。近角師が最後の講話なりし爲め來聽者算なく殆んど堂の内外に溢れたり、

△臨時講演會 (八月十二日夜)

上來の過程にて本期の夏期講習會は魔事なく終りを告げたり。

夏期講習會催趣意書

京都市内に存在せる官公私立學校は上は帝國大學より下は小學校に至るまで數百校及び有志の諸氏に頒布せしは左の如し

三伏の炎暑荐りに人を苦しむるの時に方り相謀りて清涼の地を撰んで甘露の法雨に浴せむと欲す、庶幾くば同志の士、來りて共に心涼の法を講ぜよ、

一聽講 自由 但聽講券(無料)を發行す

一日時 八月五日より同十一日迄壹週間

一講師 稻葉 昌丸師 近角 常觀師

吉谷 覺壽師 武田 照雷師

磯 經 丸師 名和 淵海師

大須賀秀道師

藤島了稔師

本多委員

野々村直太郎氏 藤島 了稔師
 赤松 連城師 旭野 慧憲師
 瑞岳 惟陶師 釋 守 愚師
 (イロハ順)

一會場 洛東建仁寺山内禪居庵方丈
 一開催事務所 京都市中珠敷屋町法藏館
 一申込所 右假事務所又は各發起團體へ便
 宜申込まれるべし
 一臨時講演會 本會附屬事業として市内各
 地に於て連日これを開く

明治三十八年八月
 京都市聯合佛教青年會

發起團體 (イロハ順)

- 一 同之町五條下ル 報 德 會
- 二 不明門通七條下ル 常 葉 青 年 會
- 三 富小路二條下ル 願 照 寺 内 青 年 會
- 四 佛具屋町魚棚上ル 佛 教 圓 德 會
- 五 不明門通萬年寺下ル 大 日 本 佛 教 青 年 興 德 會
- 六 姉小路通堀町四入 京 都 市 立 商 業 學 校 佛 教 青 年 會
- 七 堀川綾小路下ル 常 念 寺 會

油小路花屋町下四宮方青 年 德 育 會
 贊成團體 (イロハ順)
 六大新報社 六條學報社 貝葉書院 日本
 佛教法話會 保信會 法園社 法藏館 遍
 照世界社 常葉婦人會 中外日報社 了德
 寺婦人會 華頂文社 大谷派婦人法話會
 貫練會 京華看病婦學校 京華發行所 布
 教叢誌社 文書傳道會 文中女學校 教海
 一瀾社 共益社 淑女協會 宗粹社 正法
 輪社

聽講者の宗教別統計

- 一。淨土真宗 五百十五人
- 二。淨土宗 七十三人
- 三。禪 宗 十六人
- 四。天台宗 七人
- 五。日蓮宗 四人
- 六。時 宗 三人
- 七。基督敎 二人
- 八。真言宗 六人
- 九。未 詳 八十四人
- 計 七百十人

同 職業

- 1、僧侶
- 2、實業家
- 3、學生
- 4、官吏
- 5、看病婦
- 6、醫士
- 7、學校教職員
- 8、無職業

同 所屬各學校

- A、帝國大學
- B、真宗大學
- C、佛教大學
- D、真宗高倉大學寮
- E、京都法政大學
- F、東京外國語學校
- G、第三高等學校
- H、京都市立商業學校
- I、真宗京都中學
- J、京都染織學校

- K、彦根第三中學
- L、吉田中學校
- M、京華看病婦學校
- N、文中女學校
- O、淑女學校
- P、慈愛女學校
- Q、市内各尋常高等小學校



寄附金受領報告

一金貳百參拾四圓九拾八錢

內譯

一金六圓五拾錢

一金六圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

一金五圓

常葉婦人會
主幹

法藏館殿
青年德育會殿
真宗高倉大學寮殿
保信會殿
日本佛教法話會殿
京都婦人慈善會殿
常念寺會殿
橋川惠順殿
小森芳次郎殿
藤井源四郎殿
津田寅吉殿
大矢久子殿
大谷勝信殿
大谷瑩温殿
松山爲雄殿
大草惠實殿
了德寺婦人會殿

一金貳圓五拾錢

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金壹圓五拾錢

常葉婦人會
會長

大谷子殿
大谷眞殿
松居庄七殿
小早川鐵倅殿
備部慧水殿
阿部川慧水殿
石龍貫殿
菅林什尊殿
小善右衛門殿
島田廣吼殿
堅田了稔殿
藤井明期殿
水利慈音殿
赤松連城殿
近角常觀殿
立野慧明殿
岡野唯明殿
甘泉堂殿
河邊賢雄殿

一金壹圓五拾錢

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

並山介然殿
若山孝次郎殿
田伏六右衛門殿
松井茂信殿
淺井兼三郎殿
西村九郎右衛門殿
中村猪三郎殿
井筒藤三郎殿
越野吉之助殿
長澤清七殿
田中清七殿
林治左衛門殿
高橋仙助殿
寺島作太郎殿
渡邊鈴三郎殿
中村萬助殿
澤田友五郎殿
下村卯之助殿
廣瀬清太郎殿
木村太郎兵衛殿
瀧谷松五郎殿

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

一金壹圓

竹市勘三郎殿
中岡定次郎殿
小田榮次郎殿
柘植庄三郎殿
岩崎宗伯殿
大森治郎兵衛殿
伊藤常吉殿
中井三郎兵衛殿
藤井佐兵衛殿
山本秀暉殿
內貴甚三郎殿
岡崎和助殿
山田定兵衛殿
山中秀子殿
藤井熊之助殿
阪井覺明殿
竹中茂九殿
藤川更泰殿
北畠禮祐殿
佐藤秀教殿
淺井正純殿

金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢

渡部繁子殿 中村三郎殿 野村卯三郎殿 內藤萬次郎殿 宮島雪子殿 川島雪子殿 澤田なみ殿 近藤たき殿 結城春たき殿 兒門悠殿 竹園還殿 牧野神還殿 葦野敬殿 曾我謙讓殿 石津良雲殿 高木民之助殿 岸田和之三郎殿 清水彌三郎殿 淺野重郎殿 阿蘇太一郎殿 青山治三郎殿

金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢 金五拾錢

松岡龜吉殿 小野清太郎殿 天野庄三郎殿 神戶つる殿 山本卯兵衛殿 大原政介殿 島村たよ殿 拍倉樹廉殿 都倉市兵衛殿 大塚孝太郎殿 負野小左衛門殿 井出時秀殿 永田榮次郎殿 西水智輿殿 野間凌空殿 愛宕寂明殿 小賀開法殿 羽山祐令殿 高山德三郎殿 山田せい殿 川島眞量殿

金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓

種口大悟殿 鈴木秀見殿 朽木唱覺殿 宮部圓成殿 久米開警殿 滋野井秀雄殿 大矢多治子殿 廣本了賢殿 岡本清次郎殿 大橋藤吾殿 藤井鈴護殿 池邊鈴木殿 名和淵海殿 山口基千代殿 山見善月殿 淺井澄空殿 櫻井長兵衛殿 川橋鐵之介殿 川橋鐵之介殿 侯野辨次郎殿 早川順明殿

金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓 金壹圓

六條學報社殿 布敷叢誌社殿 松田善六殿 清水精一郎殿 福井了雄殿 今井しま子殿 小泉ます子殿 瑞岳惟子殿 松島勇三郎殿 宮部静枝殿 佐竹うせのん殿 山口久吉殿 山西村十次郎殿 山本彌太郎殿 種田德三郎殿 鈴木治太郎殿 丹羽平七殿 藤井吉次郎殿 河村タキ殿 畑中千代殿

一金五錢 瀧川詰所殿 一金五錢 森口殿
以 上 何 某殿

寄附物品受領報告

佛 教 聖 典	十部	東京 三省 堂殿
古 英 雄 と 宗 教	五部	佛 教 の 眞 精 神
眞 宗 問 答	五部	一 獎 教 の 眞 精 神
青 年 と 信 仰	五部	一 宗 教 の 眞 精 神
原 人 論 和 譯	五部	一 覆 教 照 心 啓 蒙
眞 宗 入 門 指 南	五部	一 眞 宗 寶 訓
三 博 士 佛 教 講 演 集	壹部	一 青 年 の 宗 教 活
信 仰 の 餘 瀝	壹部	一 信 仰 の 生 活
死 の 問 題	壹部	京 都 興 教 書 院 殿
合計十六點	七十部	
舊 信 仰 か 新 信 仰 か	五部	一 庄 松 有 の ま の 記
處 世 の 道	五部	一 佛 教 入 門 初 步
通 俗 佛 教 要 領	十五部	京 都 顯 道 書 院 殿
合計五點	三十五部	

軍 人 信 仰 美 談	十部	佛 門 立 志 史 論	十部
眞 美 人	十部	婦 女 の 精 神	十部
婦 人 手 引 卹 艸	十部	櫻 花 の 精 神	十部
東 本 願 寺 獨 立 史	五部	信 心 報 謝 示 談	五部
報 謝 の 眞 義	五部	我 等 が 安 心	十部
唱 門 二 十 四 孝	十部	萬 原 道 心	十部
人 中 の 小 白 蓮	十部	驚 退 道 治	十部
孝 仰 活 談	五十部	元 享 釋 書 和 解	壹部
信 仰 活 談	五十部		
合計十七點	百八十壹部		
忠 孝 の れ し へ	拾 五 部	京 都 法 藏 館 殿	
團 扇	五 十 本	京 都 永 田 榮 次 郎 殿	
		京 都 櫻 庭 長 兵 衛 殿	

支出報告

一金百九拾圓五拾一錢五厘	支 出
一金貳拾六圓	講 師 旅 費
一金貳拾四圓	講 師 旅 費
一金拾四圓〇八錢	會 場 費
一金九圓	懇 話 會 費
一金四圓參拾錢五厘	餘 興 費

一 金拾壹圓
 一 金六圓五拾錢
 一 金貳拾五圓
 一 金貳拾五圓五拾八錢
 一 金拾六圓七拾四錢
 一 金八圓四拾四錢五厘
 一 金拾圓五拾錢
 一 金參圓
 一 金五圓貳拾錢
 一 金壹圓拾六錢五厘

決算報告

收入
 一 金貳百四拾參圓五拾八錢
 一 金貳百參拾四圓九拾八錢
 一 金八圓六拾錢
 一 金貳百四拾參圓五拾八錢

支出
 一 金貳百四拾參圓五拾八錢
 一 金貳百參拾四圓九拾八錢
 一 金八圓六拾錢
 一 金貳百四拾參圓五拾八錢

印刷費
 施本印刷費
 講演集印刷費
 菓當子費
 辨當諸雜費
 開催備諸雜費
 謝儀及給與
 廣告料
 廣車及運搬費
 人車及運搬費
 消耗

京都市聯合佛教團定期聖會(說教演說)告示

京都市聯合佛教青年會會計

內譯
 一金百九拾圓五拾壹錢五厘
 一金五拾參圓〇六錢五厘
 差引無出入

支
 後年度年繰越金出

十日	午後二時	麩屋町姉小路上ル泉德寺	日本佛教法話會
九日	午後二時	西洞院中立賣下ル長德寺	常葉婦人會
八日	午後二時	上立賣大宮西入德圓寺	大谷派婦人會
七日	午後二時	新シ町蛸藥師下ル眞蓮寺	常葉婦人會
六日	午後二時	松原西洞院東入光圓寺	大谷派婦人會
五日	午後二時	河原町四條上ル	了德寺
四日	午後二時	堀川綾小路上ル	常念寺
三日	午後二時	大谷派本山内	大谷派婦人會
二日	午後二時	烏丸七條下ル常葉幼稚園	常葉婦人會
一日	午後二時	佛具屋町魚棚上ル圓德寺	佛教圓德會
十日	午後二時	堀川綾小路上ル	常念寺

十一日	午後二時 不明通下珠敷下ル 元誓願寺大宮西入 堀川綾小路上ル	東賢寺坊
十二日	午後二時 中長者町西洞院西入法光寺 元誓願寺大宮西入 間之町五條下ル養蓮寺 堀川綾小路上ル	正賢寺 日本佛教法話會
十三日	午後一時 右 同 所 間之町上珠敷下ル常葉婦人會館 綾小路高倉東入小森醫院 三條東洞院西入北側	常念寺 常念寺會支會
十四日	午後二時 元誓願寺大宮西入正賢寺 狹屋町姉小路上ル泉德寺 新先斗町夷川下ル鴨東會場 五條川端東入善立寺	常葉婦人會 日本佛教法話會
十五日	午後二時 右 同 所 中珠敷東洞院西入法藏館 堀川綾小路上ル常念寺 新寺町上珠敷上ル	常葉婦人會 常念寺會
十六日	午後一時 堀川綾小路上ル常念寺 新寺町上珠敷上ル	常葉婦人會 常念寺會
十七日	午後二時 富小路四條下ル德正寺	大谷派婦人會
十八日	午後二時 富小路四條下ル德正寺	大谷派婦人會

十八日	暮早々 下珠敷屋町新寺町西入	善入寺青年會
十九日	午後二時 三條川端東入正林寺 河原町四條下ル了德寺 姉小路堺町西入 堀川綾小路上ル	大谷派婦人會 常念寺青年會 日本佛教法話會
二十日	暮早々 日暮樵木町上ル等觀寺 不明萬年寺下ル奉養講 姉小路堺町西入佛教會堂	常念寺青年會 大谷派婦人會 日本佛教法話會
廿一日	午後一時 元誓願寺大宮西入 狹屋町姉小路上ル泉德寺 不明萬年寺下ル亦誠講社	日本佛教法話會 正賢寺 日本佛教法話會
廿二日	午後一時 西中筋魚棚下ル慶證寺 姉小路堺町西入京華少年會 姉小路堺町西入京都市立商業學校	信仰告白會 日本佛教法話會
廿四日	午後二時 佛敎青年會々々館 右 同 所	感話會 講演會
廿五日	暮早々	青年興德會

每日 曜 午後一時 暮早々

第三土曜 暮早々

第二土曜 暮早々

右何れも參聽自由なり有縁の同胞速に來りて限りなき如來の慈光に浴せよ

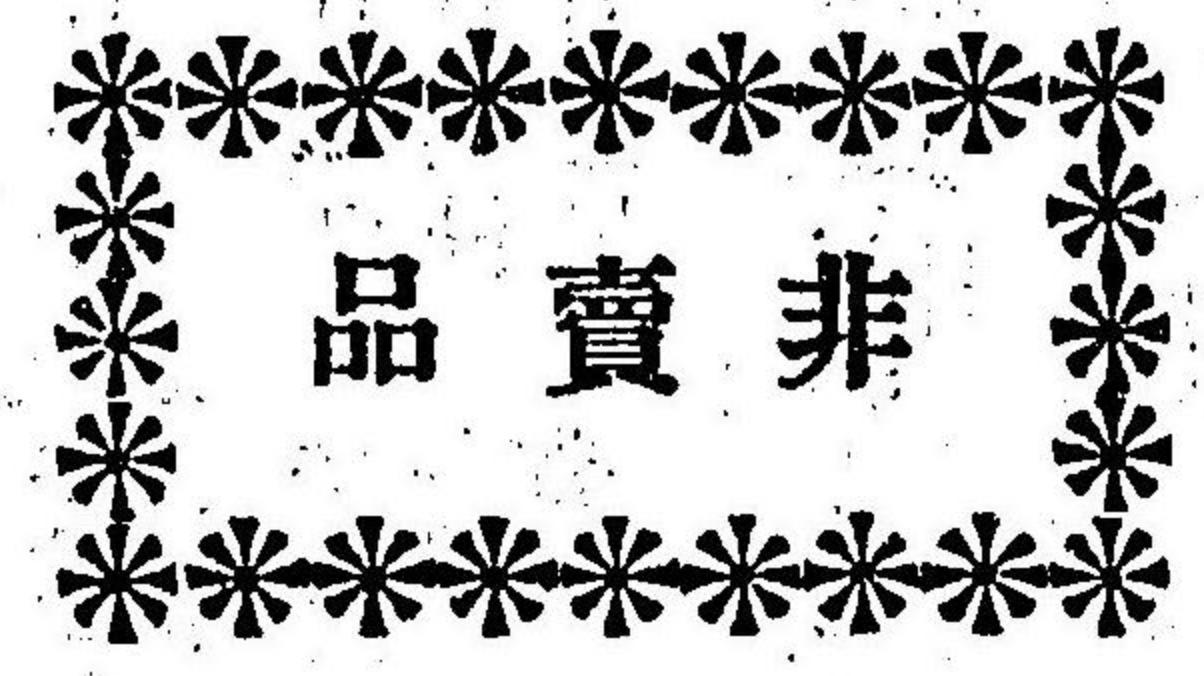
明治三十八年十月二十日印刷
同 年十月二十五日發行

編輯者 京都市聯合佛教青年會

代表者 松 本 雪 城

京都市下京區中珠數屋町烏丸東入二十八
講町二十二番戶

發行兼印刷者 西 村 七 兵 衛



京都市聯合佛教青年會藏版

A

1950

特 18

438

仏教講演集

国立国会図書館

015458-001-3

特18-438

仏教講演集

京都市聯合仏教青年会／編

M38

ABC-1116

